

Koorimotonishibaru

Minamibata

郡元西原遺跡・南畑遺跡

—市道鷹尾上長飯通線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2016年3月

宮崎県都城市教育委員会

Koorimotonishibaru

Minamibata

郡元西原遺跡・南畑遺跡

—市道鷹尾上長飯通線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

序文

本書は、市道鷹尾上長飯通線道路改良事業に伴い、都城市教育委員会が平成26年度に実施した郡元西原遺跡・南畑遺跡の発掘調査報告書です。

本書に所収いたしました郡元西原遺跡・南畑遺跡は、都城市の中央部郡元町に所在しております。ここで、中世～近世の遺構・遺物が見つかりました。遺構は溝状遺構をはじめ、掘立柱建物跡や土坑などが多く見つかっています。本遺跡が位置する郡元地区では、これまでも数多くの発掘調査が実施され、都城盆地の歴史を紐解く上で重要な遺跡が数多く見つかっています。本遺跡もこのような遺跡の一つとして調査・記録し、発掘調査報告書としてここに刊行いたします。本書が、こうした地域の歴史や文化財に対する理解と認識を深める一助になるとともに、学術研究の資料として多くの方々に活用して頂ければ幸いです。

最後となりましたが、発掘調査から本書刊行に至るまで、円滑な作業に御協力いただいた市民の皆様、関係者諸機関に心から感謝申し上げます。

2016年3月

都城市教育委員会
教育長 黒木 哲徳

例言

1. 本書は、市道鷹尾上長飯通線道路改良事業に伴い、平成26年度に実施した郡元西原遺跡・南畑遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は都城市教育委員会が主体となって、同市文化財課主事原栄子、同嘱託早瀬航が担当した。
3. 本書で使用したレベル数値は海拔絶対高で、基準方位は真北である。
4. 本書で使用した遺跡位置図は、都城市国土基本図の1万分の1を基に作成した。
5. 現場における遺構実測は、発掘調査作業員の協力を得て原・早瀬が行った。遺構図のトレースについては、株式会社CUBICのトレースくんを用い原・早瀬・同嘱託玉谷鮎美が行い、それをAdobe社のIllustratorで編集した。
6. 本書に掲載した遺物の実測は整理作業員および原・早瀬が行い、トレースは原が行った。
7. 現場での遺構写真撮影・出土遺物の写真撮影は原が行った。空中写真撮影は九州航空株式会社へ委託した。
8. 石器の観察・分類・実測については、栗山の助言・協力を得た。
9. 本書の遺物番号は通し番号とし、本文・挿図・写真の番号は一致する。
10. 土層と遺物の色調は『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修）2001年度前期版を参考にした。
11. 本書に掲載した遺構実測図の縮尺は基本的に、堅穴状遺構・土坑・ピットを1/40、掘立柱建物跡を1/80、溝状遺構は1/80とし、遺構の規模によりこれ以外の縮尺で掲載しているものがある。遺物実測図は基本的に土器・陶磁器類は1/3、鉄滓は1/2、石器・石製品を1/3とし、各図版に示している。
12. 本書の執筆および編集は原が行った。
13. 発掘調査で出土した遺物と全ての記録（図面・写真など）は都城市教育委員会が保管している。
14. 遺構の表記に使用した略号は以下のとおりである。
SA：堅穴住居跡 SB：掘立柱建物跡 SC：土坑 SD：溝状遺構 P：ピット SS：竊集遺構 SX：不明
15. 出土遺物の分類・報告に際して、下記文献を参考とした。

上田 秀夫 1982「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会

森田 勉 1982「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会

山本 信夫編 2000『大宰府条坊跡XV—陶磁器分類編—』太宰府の文化財 第49集 太宰府市教育委員会

柴畑 光博 2004「都城盆地における中世土師器の編年に関する基礎的研究(1)」『宮崎考古』第19号 宮崎考古学会

目次

本文目次

第1章 序説	1	(5) ヒット	31
第1節 調査の経緯と経過	1	(6) 縦集積遺構	32
第2節 調査組織	1	(7) 不明遺構	33
第2章 遺跡の位置と環境	3	第4節 包含層出土遺物	34
第1節 地理的環境	3	第5節 小結	36
第2節 歴史的環境	3	第4章 南畑遺跡の発掘調査	40
第3章 郡元西原遺跡の発掘調査	7	第1節 調査の方法と概要	40
第1節 調査の方法と概要	7	第2節 南畑遺跡の基本層序	40
第2節 郡元西原遺跡の基本層序	7	第3節 検出遺構	42
第3節 検出遺構	11	第4節 小結	44
(1) 竪穴状遺構	12	第5章 まとめ	46
(2) 掘立柱建物跡	12	写真図版	47
(3) 土坑	14	報告書抄録	57
(4) 溝状遺構・道路状遺構	15		

挿図目次

第1図 試掘調査結果実測図	2	第23図 SD11 出土遺物実測図	25
第2図 郡元西原遺跡・南畑遺跡の周辺遺跡位置図	5	第24図 SD12・SD13・SD14・SD17 実測図	26
第3図 土層断面図	8	第25図 SD15 実測図	27
第4図 発掘調査地点	9	第26図 SD16 実測図	28
第5図 郡元西原遺跡遺構配置図	11	第27図 SD18 実測図	29
第6図 SA1・SA2 実測図	12	第28図 SD19 実測図	29
第7図 SB1・SB2 実測図	13	第29図 SD12・SD16・SD19 出土遺物実測図	30
第8図 SB3 実測図	13	第30図 SD20 実測図	30
第9図 土坑および土坑内出土遺物実測図	14	第31図 SD21 実測図	31
第10図 SD1 実測図	16	第32図 ヒット実測図	32
第11図 SD1 出土遺物実測図	16	第33図 SS1 実測図	32
第12図 SD2 実測図	17	第34図 SS1 軽石実測図	32
第13図 SD2 出土遺物実測図	17	第35図 SX1 実測図	33
第14図 SD3 実測図	18	第36図 SX1 出土遺物実測図	33
第15図 SD4・SD5 実測図	18	第37図 SX2 実測図	34
第16図 SD6 実測図	19	第38図 包含層出土遺物実測図	35
第17図 SD7・SD8・SK1 実測図	20	第39図 東壁土層断面図	41
第18図 SD7・SD8 出土遺物実測図	21	第40図 南畑遺跡遺構配置図	42
第19図 SD9 実測図	22	第41図 土坑内埋壘実測図	43
第20図 SD10 実測図	23	第42図 SD1 実測図	44
第21図 SD10 出土遺物実測図	23	第43図 SD1 出土遺物実測図	44
第22図 SD11 実測図	24	第44図 SK1 実測図	45

挿表目次

第1表 郡元地区周辺遺跡一覧表	6	第4表 郡元西原遺跡出土土師器観察表	39
第2表 検出ヒット詳細一覧表	38	第5表 郡元西原遺跡出土粘土塊・石器・鉄滓観察表	39
第3表 郡元西原遺跡出土須恵器・陶磁器観察表	38	第6表 南畑遺跡出土遺物観察表	45

図版目次

写真図版1	43	写真図版7	52
写真図版2	47	写真図版8	53
写真図版3	48	写真図版9	54
写真図版4	49	写真図版10	55
写真図版5	50	写真図版11	56
写真図版6	51		

第1章 序説

第1節 調査の経緯と経過（第1図）

郡城市郡元町・早水町において、郡城市道路公園課（以下、市道路公園課）による市道鷹尾上長飯通線の道路改良工事（現道拡幅及びバイパス工事）を目的とする計画があり、それに伴い、平成23年7月7日に市道路公園課より郡城市教育委員会文化財課（以下、市文化財課）に文化財所在の有無について照会がなされた。これを受け、当該地は「周知の埋蔵文化財包蔵地」の枠外ではあったものの、永久構築物である道路建設であったことから早水町側を平成23年度に、郡元町側は事業の進捗状況により平成26年2月20・21日に市文化財課が試掘調査を実施した。試掘調査では道路建設予定地に基本的に2×2(m)のトレンチを10箇所設定した。調査を行った結果、事業対象地南側の約495㎡の範囲で、北側では約166㎡の範囲でそれぞれ遺跡が遺存していることが判明した。これらの遺跡残存範囲はその旧字名からそれぞれ「郡元西原遺跡（南側）」「南畑遺跡（北側）」として、新規発見の遺跡の登録を行った。両遺跡は試掘調査での出土遺物から、中世の遺跡であると思われる。このような試掘調査の結果を受け、当該地における工事に際しては埋蔵文化財保護のための協議が必要である旨の回答を行った。

その後、市文化財課は市道路公園課と協議を重ね、道路建設に伴い遺跡が影響を受ける範囲について記録保存のための発掘調査を実施することで合意した。協議の中で、郡元西原遺跡が遺存する南側の道路建設については、市道路公園課が地元住民に対して平成26年9月から工事着手するという旨の説明を行っていたため、平成26年度4月から調査を行い、南畑遺跡については同年度10月以降に調査を実施し、翌平成27年度に両遺跡の発掘調査成果をまとめた報告書を作成・刊行することで合意した。

郡元西原遺跡の発掘調査は平成26年4月24日から平成26年8月29日までの予定であったが、同年7月30日に全ての作業を終了した（実調査日数49日）。発掘調査と並行して出土遺物の水洗・注記作業を市文化財課で行った。

南畑遺跡は平成26年度10月以降に発掘調査を行う予定であったが、郡元西原遺跡の調査が予定より早く終了したため、郡元西原遺跡の調査に引き続き、平成26年8月11日から平成26年8月27日で全ての作業を終了した（実調査日数12日）。南畑遺跡についても発掘調査と並行して出土遺物の水洗・注記作業を市文化財課で行った。

平成27年度は前年度に引き続き出土遺物の接合・復元・実測等の整理作業および遺構図の整理を行い、その後発掘調査報告書の執筆・編集作業を行った。

第2節 調査組織

発掘調査及び発掘調査報告書作成の調査組織は以下のとおりである。

平成26年度の組織（発掘調査実施年度）

調査主体者 宮崎県郡城市教育委員会

調査責任者 教育長 黒木 哲徳

調査事務局 教育部長 児玉 貞雄

文化財課長 新宮 高弘

文化財副課長 松下 述之

文化財課主幹 栗畑 光博

調査担当 文化財課主事 原 栄子

文化財課嘱託 早瀬 航

発掘調査従事者 上西 政美、木上 保、津曲 節子、中原 忠珍、抜迫 清美、原田 貢、広畑 雄二

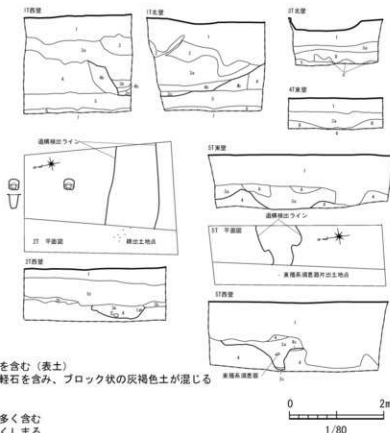
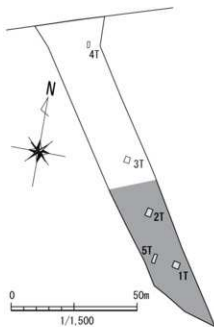
平成27年度の組織（報告書刊行年度）

調査主体者 宮崎県郡城市教育委員会

調査責任者 教育長 黒木 哲徳

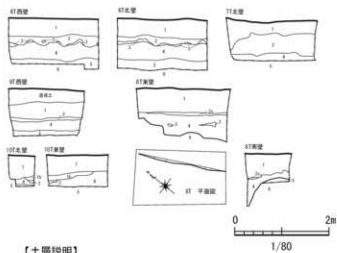
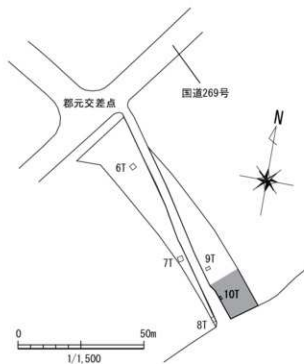
調査事務局 教育部長 児玉 貞雄

文化財課長 新宮 高弘



【土層説明】

1. 灰褐色砂質土…1cm以下の黄色軽石・白色軽石を含む（表土）
- 1b. 灰褐色砂質土+黒褐色砂質土…1cm以下の黄色軽石を含み、ブロック状の灰褐色土が混じる
2. 白色軽石…桜島文明軽石
- 3a. 黒褐色砂質土…5mm以下の黄色軽石を含む
- 3b. 黒褐色砂質土…1cm以下の黄色軽石を3a層より多く含む
- 3c. 灰黒色硬質土…1cm以下の黄色軽石を含み、硬くしまる
4. 黄色軽石…御池降下軽石
- 4b. にぶい黄橙色軽石…御池軽石が水分を含み黒色化したもの
- 4c. 赤褐色軽石…御池軽石が赤色化したもの
5. 黒色粘質シルト土…5mm以下の軽石を含む
6. アカホヤ火山灰漸移層
7. アカホヤ火山灰層
- A. 灰黒色硬質土…5mm以下の黄色軽石をまばらに含み、硬くしまる
- B. 黒褐色砂質土…5mm以下の黄色軽石をややく含み、ブロック状に4層が混じる
- B'. 黒褐色砂質土…5mm以下の黄色軽石を多量に含み、ブロック状に4層が混じる



【土層説明】

1. 灰褐色砂質土…1cm以下の黄色軽石・白色軽石を含む（表土）
- 1b. 黒褐色砂質土…1cm以下の黄色軽石を多量に含み、硬くしまる
2. 黒灰色砂質土…5mm以下の黄色軽石・白色軽石を含む
- 2b. 黒灰色砂質土…2層より軽石をややく多く含む
- 2c. 黒褐色硬質土…1cm以下の黄色軽石を含み、硬くしまる 硬化面
3. 白色軽石…桜島文明軽石 ブロック状
4. 黒褐色砂質土…5mm以下の黄色軽石を少量含む
5. 暗褐色砂質土…1cm以下の黄色軽石を多く含む
6. 黄色軽石…御池降下軽石

第1図 試掘調査結果実測図 (S=1/80 1/1,500)

	文化財副課長	武田 浩明
	文化財課主幹	栗畑 光博
報告書作成担当	文化財課主事	原 栄子
整理作業従事者	児玉 信子、福藪 泰子	

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

今回発掘調査の対象となった郡元西原遺跡・南畑遺跡は都城市の中心部郡元町に所在する。都城市は九州東南部、宮崎県の南西部に位置し、都城盆地のほぼ中央部を占める。平成18年1月1日に高崎町、高城町、山田町、山之口町の北諸県郡4町との合併により新都城市が誕生した。この合併に伴い現在人口は約17万人となり、市域は約650km²に及ぶ。人口規模では南九州第3の都市となる。

都城市が位置する都城盆地は、南北約25km、東西約15kmの楕円状を呈している。北西に霧島火山群を仰ぎ、西側を瓶台山や白鹿山などの山地に、東から南を鰐塚山・柳岳を主峰とする山地に囲まれ、西南方のみわずかに開かれた地勢を呈する。郡元西原遺跡・南畑遺跡の所在する沖水地区は、大淀川上流右岸に位置し、地区南部を沖水川が流れている。北部地域は、北西方向に緩やかに傾斜する開析扇状地形に属している。南部地域は一万城扇状地の北縁部に位置し、沖水川に浸食され河岸段丘状の地形を呈している。

郡元西原遺跡・南畑遺跡は市中心部の沖水地区の郡元町に所在しており、北に沖水川、南に年見川が流れ、沖水川に浸食された都城市街地を形成する開析扇状地の北側に立地しており、標高約157～158mに位置する。調査地点の現況は郡元西原遺跡が竊合跡、南畑遺跡が宅地跡である。

第2節 歴史的環境 (第2図 第1表)

郡元西原遺跡・南畑遺跡が所在する沖水地区の郡元地域では、区画整理事業に伴い沖水川左岸の河岸段丘端部一帯で発掘調査が実施され、多くの遺跡が確認されている。また、これらに連なる祝吉一帯には遺物散布地があり、「祝吉・郡元地区遺跡群」を形成している。一方、扇状地の扇尖部にも多くの遺跡が見られ、とくに早水神社周辺には重要な遺跡が集中しており、「早水遺跡群」を形成している。ここでは、これまでに実施されてきた発掘調査の成果を参考に、時代ごとに本遺跡を取り巻く歴史的環境について触れてみたい。

まず縄文時代の遺跡については、この地区では縄文時代早期の遺構・遺物が多く見られる。郡元西原遺跡から南へ約250mに位置する白山原遺跡では早期の集石遺構や配石遺構が28基検出されており、出土遺物についても早期中葉～後葉の土器等が出土している。宮崎県埋蔵文化財センターが平成16年に発掘調査を行った池島遺跡でも早期の集石遺構が11基検出されており、出土遺物については白山原遺跡と同時期の早期中葉の土器に加えて前期と後期の土器等も出土している。池ノ友遺跡では平成9年に行われた第2次調査で早期の集石遺構や土器が出土している。郡元西原遺跡から北西へ約800mに所在する松原地区第Ⅱ遺跡では、縄文時代晩期の土壌が1基検出されており、土壌内から晩期の深鉢も出土している。

弥生時代は調査事例が多く、この地域では比較的多くの集落跡が見つまっている。年見川を挟んで河岸段丘上に広がる年見川遺跡では、弥生時代終末期の集落跡が見つまっている。本遺跡は都城市内における発掘調査事例で学史上著名である。昭和30年代中頃に都城市官運運動場建設の際に多くの遺物が出土し、地元在住の児玉三郎氏によって収集された。その後開発によって次第に遺跡が破壊されていく状況にあったことから、宮崎県教育委員会が九州大学教授の鏡山猛氏・石川恒太郎氏・日高正晴氏らに委嘱して調査を実施したものである。調査では竊穴住居跡2基・周溝状遺構1基が見つまっている。祝吉遺跡では昭和55年に第1次調査、昭和56年に第2次調査が行われており、弥生時代後期～古墳時代前期の集落跡が見つまっている。1次調査の1号住居跡からは50点近くの磨製石礫の未製品も出土しており、土器についても多様な器種の出土が見られる。池ノ友遺跡では早水町内で初めての弥生中期後半の集落跡が検出された。竊穴住居跡12基・土坑8基・周溝状遺構3基が検出されており、3期に分けて遺構の変遷が捉えられている。牟田ノ上遺跡でも集落跡が見つかっており、後期後半と弥生時代終末～古墳時代初期の時期区分がされている。年見川の南側に立地する向原第2遺跡では、弥生時代後期終末～古墳時代初期に位置づけられる竊穴住居跡3基等が検出されている。

古墳時代については今回の調査地点周辺では見つからない。古墳なども周辺では検出されており、古墳時代の様相については不明瞭である。

古代の遺跡も調査事例は少ない。早水神社参道沿いにある**沖水古墳(2号墳)**は低い墳丘を持ち、1936(昭和11)年に古墳として県の文化財に指定されている。発掘調査が行われていないため築造時期や埋葬主体などは不明であるが、1974(昭和49)年、墳丘の除草作業中に軽石製の円筒形容器が発見され、その側から経筒・湖州鏡・玉が見つかったことから、経塚である可能性が高い。このほか、池島遺跡や池ノ友遺跡では、平安時代末に造営されたとみられる周溝墓が検出され、副葬品も見ついている。また、池島遺跡からは当地域では希少な初期高麗青磁が出土している。

中世については、この沖水地区一帯では多くの中世遺跡が所在しており、遺跡の形成時期が3時期に分けられる遺跡が多く見受けられる。郡元西原遺跡から西に約600mのところには**祝吉御所跡**が所在している。摂関家領島津荘の惣地頭職に補任された島津氏初代の推宗忠久が、鎌倉より下向して御所を構えたと伝えられている場所である。当地は古代より「島津」と呼ばれ、日本最大の荘園である島津荘の中心であったと考えられている。平成5年に計画された公園再整備事業に伴って確認調査を行った結果、道路状遺構や土壌は検出されたが、大型の建物跡などは確認されず、鎌倉時代の館跡を示すような遺構群は検出されなかった。池ノ友遺跡では比較的高い密度で遺構が検出されており、中でも11世紀代に位置づけられる周溝墓は島津荘成立期(11世紀前半)の遺構であることが注目されている。祝吉御所跡の東側に隣接する**祝吉第3遺跡**では、平成6年に第1次調査、平成25年度に第2次調査が行われている。両調査の結果から、遺跡形成の中心時期は13世紀中頃以降～14世紀代であるとされる。出土遺物からも13～14世紀代の時間幅が認められ、検出された遺構群の時期は14世紀代が中心となる可能性が高いことが明らかとなった。郡元西原遺跡から北に約800mのところにある**久玉遺跡**では、昭和63年から平成12年にかけて12回にわたる調査が行われている。本遺跡は祝吉・郡元地区の土地区画整理事業に伴い発掘調査が実施された。遺跡は市街地を形成する大淀川の支流、沖水川によって浸食された一方城崩状地の北縁に位置する。調査の結果、調査区のほぼ全域で中・近世の多数の溝状遺構が検出されており、加えて道路状遺構や掘立柱建物跡などの建物遺構も伴っている。第1次調査や11次調査では大溝が検出されており、中世の区画溝であるとされる。中でも1次調査で発見された大溝で方形に区画された館跡は、松原地区第1遺跡で検出された遺構(下記)と一連のものであり、本地区の中世新田開発と絡んだ拠点であった可能性が指摘されている。こうした中・近世の遺構群は当時の地割を復元する上で貴重であり、その意味でも久玉遺跡は重要遺跡であるといえる。**樺山・郡元地区遺跡**は年見川河川改修事業に伴って行われた発掘調査で、調査区は全長1.5kmにも及び、中世を中心とした遺構・遺物が検出されている。検出された遺構は溝状遺構42条、掘立柱建物跡16棟、井戸4基、土壌19基にのぼる。遺構内の出土遺物や松島文明軽石の堆積状況等から12～14世紀の小規模な集落から、15～16世紀には遺跡一帯に集落(屋敷地)が広がるという状況を書き出している。これは松原地区遺跡でも類似する状況が窺える。**松原地区遺跡**では遺構内の文明軽石の堆積状況や、遺構内出土遺物からそれぞれ13世紀後半の大溝を廻らす館跡、14世紀後半～15世紀前半の2号溝によって区画された館跡、16～19世紀の掘立柱建物跡群の3時期に分類している。13世紀後半の館跡が上記した久玉遺跡の館跡と一連のものである。樺山・郡元地区遺跡から南西～150mほどのところには**天神原遺跡**が所在しており、同じく中世の溝状遺構や道路状遺構が検出されている。天神原遺跡でも出土遺物や文明軽石の堆積状況から、12世紀末頃～14世紀代、14世紀後半～15世紀前半、15世紀後葉～16世紀代の3時期に分類している。中でも、出土遺物から舶載の青・白磁や東播系埴鉢などが少量ながらも集中して出土する段階(13世紀後半～15世紀前半頃)を遺跡のピークとしており、17世紀代の遺構・遺物が全く認められないことから17世紀代には樺山・郡元地区遺跡に集落の集約化が行われたと推察している。

近世については、久玉遺跡において各調査区で近世の遺構、遺物が見ついている。溝によって区画された集落跡が検出され、薩摩焼や肥前系の染付碗など、多数の遺物が出土しており、当該期の一般集落の様相を示す事例と言える。

【参考文献】

- 小田富士雄 1989『年見川遺跡』宮崎県史 資料編考古1 宮崎県
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2004『池島遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第84集
- 郡城市史編さん委員会(編) 2006『郡城市史 資料編考古』郡城市
- 郡城市教育委員会 1986『郡城市遺跡詳細分布調査報告書(市内中央部)』郡城市文化財調査報告書 第5集
- 郡城市教育委員会 1989『松原地区第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡』郡城市文化財調査報告書 第7集
- 宮崎県教育委員会 1992『樺山・郡元地区遺跡』年見川小規模河川改修事業に伴う埋蔵文化財調査報告書



1. 郡元西原道跡 2. 南畑道跡 3. 祝吉道跡 4. 松原地区道跡 5. 久玉道跡 6. 牟田ノ上道跡
 7. 白山原道跡 8. 池ノ友道跡 9. 池鳥道跡 10. 祝吉御所跡 11. 祝吉第3道跡 12. 榊山・郡元道跡
 13. 天神原道跡 14. 沖水古墳 15. 年見川道跡 16. 向原第2道跡

第2図 郡元西原道跡・南畑道跡の周辺道跡位置図 (S=1/10,000)

- 都城市教育委員会 1993『天神原遺跡』都城市文化財調査報告書 第23集
 都城市教育委員会 1995『久玉遺跡』—第6次調査— 都城市文化財調査報告書 第32集
 都城市教育委員会 1997『久玉遺跡』—第7・8次調査概要報告書— 都城市文化財調査報告書 第39集
 都城市教育委員会 2000『池/友遺跡(第1次調査)』都城市文化財調査報告書 第49集
 都城市教育委員会 2000『郡元地区遺跡群』都城市文化財調査報告書 第51集
 都城市教育委員会 2002『白山原遺跡』都城市文化財調査報告書 第57集
 都城市教育委員会 2009『向原第2遺跡(第3次調査)』都城市文化財調査報告書 第92集
 都城市教育委員会 2015『祝吉第3遺跡』都城市文化財調査報告書 第116集

第1表 郡元地区周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	種別	時代	概要(古代～中世・近世関連のみ)
1	郡元西原遺跡	郡元町3332-9	集落跡	中世	竪穴式遺構・溝状遺構・掘立柱建物跡・土坑・土師器・陶磁器
2	南畑遺跡	郡元町2952-30	集落跡	中世	溝状遺構・土師器・薩摩焼
3	祝吉遺跡	祝吉町字祝吉	集落跡	縄文・弥生・古墳・古代・中世・近世	竪穴遺構・溝状遺構・掘立柱建物跡・土師器・陶磁器(白磁・青磁・染付等)
4	松原地区遺跡	郡元町字久玉・松原	城館跡、他	縄文・弥生・古墳・中世・近世	溝・掘立柱建物跡・井戸・土師器・陶磁器・染付・薩摩焼・琉球系陶器・古銭
5	久玉遺跡	郡元町字久玉	散布地・城館跡	縄文・古墳・中世・近世	溝状遺構・掘立柱建物跡・井戸・竪穴式遺構・土師器・国産陶器・輸入陶磁器・軽石製五輪塔・銅銭
6	牟田ノ上遺跡	早水町字牟田ノ上	集落跡	弥生・古墳・古代・中世	掘立柱建物跡・溝状遺構・土壇・土師器・輸入陶磁器
7	白山原遺跡	早水町字白山	散布地・集落跡	縄文	
8	池ノ友遺跡	早水町字池ノ友	集落跡	弥生・古墳・平安・中世	周溝墓・掘立柱建物跡・溝状遺構・輸入陶磁器・国産陶器
9	池島遺跡	早水町3882番地外	住居跡・散布地	縄文・弥生・中世	周溝状遺構・溝状遺構・土師器・須恵器・陶磁器
10	祝吉御所跡	郡元町3420	館跡	中世	道路状遺構・土坑・土師器・輸入磁器・国産陶器・鉄滓
11	祝吉第3遺跡	郡元町・早水町字天神原・池島・祝吉	集落跡	中世	掘立柱建物跡・溝状遺構・埴土遺構・土坑・土師器・陶磁器・石製品・鉄製品・銭貨
12	禰山・郡元地区遺跡	郡元町・立野町・三股町	集落跡	中世・近世	溝状遺構・掘立柱建物跡・井戸・土壇・輸入磁器・国産陶磁器・土師器・須恵器
13	天神原遺跡	早水町字天神	集落跡	中世・近世	溝状遺構・土坑・道路状遺構・土師器・薩摩焼・近世陶磁器
14	沖水古墳	早水町3886-1	古墳(円墳)	古墳	
15	年見川遺跡	妻ヶ丘町・轟備原町・年見町・立野町	集落跡	弥生・古墳	
16	向原第2遺跡	立野町字向原	集落跡	縄文・古墳・近世	

第3章 郡元西原遺跡の発掘調査

第1節 調査の方法と概要（第4図）

調査対象地は郡城市郡元町 3332-9 に所在し、国道 269 号線から北に 300 m 程入った場所に位置する。調査前は鶏舎跡であった。市道建設に伴い行った事前の試掘調査により、遺跡が遺存していることがわかった約 495 m²について発掘調査を実施した。

調査地点は、大淀川の支流沖水川に浸食された郡城市街地を形成する開析扇状地の北側に立地しており、標高約 157 ~ 158 m に位置する。調査区の南東が高く、そこから北西に向かって緩やかに下がるが、ほぼ平坦といえる程緩やかな傾斜である。なお、調査区の設定にあたっては、公共座標軸系の SN 座標線に一致した 5 × 5 m を I 区画とし、東西方向を西から 1, 2, 3…の順に算用数字で、南北方向を南から A, B, C…の順にアルファベットで表記し、この組み合わせで区名を付けた。また、調査区周辺には廃土置場として使用できる土地面積が十分に確保できなかったため、対象地の南側を I 区、北側を II 区とし、I 区の調査時には II 区に廃土を置き、調査終了後埋め戻しを行った後、II 区の調査を行い、I 区に廃土を置きながらの作業となった。

発掘調査はまず重機による表土剥ぎ取りを行った。上記したとおり、対象地は鶏舎跡地であったためアスファルト舗装されており、重機によってアスファルトを剥いだ後、表土層の剥ぎ取りを行った。事前を実施した試掘調査では、現耕作層である表土層の直下から中世相当の遺構が検出されていたため、表土のみを重機により剥ぎ取った。それ以下は人力で掘り下げ、まず基本土層の III a 層上面での遺構検出を試みた。一部耕作により IV a 層（御池軽石漸移層）まで表土が被っている部分については、IV a 層での遺構検出を行った。検出後は適宜実測および写真撮影等の記録保存の措置を講じた。調査終了後は調査区の埋め戻しを行い、全ての調査工程を終了した。

調査の結果、中世の堅穴状遺構 2 基、掘立柱建物跡が 2 棟、土坑 7 基、溝状遺構 22 条、ピット 30 基等を確認した。出土遺物については、中世の土師器・陶磁器（青磁・白磁等）・石器等が出土した。

第2節 郡元西原遺跡の基本層序（第3図）

本遺跡は大淀川の支流沖水川に浸食された開析扇状地の北側に立地しており、通常郡城市街地周辺の遺跡でみられるものと同様の土層堆積が確認された。鍵層となり得る火山灰は上位より桜島文明軽石、霧島御池軽石、アカホヤ火山灰等がみられる。標高的には南から北に向かい緩やかに低くなる。基本土層の設定にあたっては、試掘調査で確認された層順を基準とし、以下のとおり設定した。なお、本発掘調査では御池軽石層上面まで調査を行った。

I a 層は、1cm 以下の黄色軽石及び白色軽石を含む灰褐色砂質土で、鶏舎建設の際に造成された造成土であると考えられる。I b 層は旧耕作土であり、1cm 以下の黄色軽石、5mm 以下の白色軽石を多く含む黒褐色砂質土である。I 区では I b 層が IV 層上面まで到達しており、北（II 区）に行く程表土層が薄く、III 層の残りが良い。

II 層は白色軽石層で、桜島起源の文明軽石（Sz-3）である。調査区全体で確認できるほどの堆積ではなく、溝状遺構が埋まる過程で地形的に落ち込んでいた部分にのみ堆積が確認される。

III 層は 5mm 以下の黄色軽石をまんべんなく含む黒色シルト土で、中世の遺物包含層である。II 区北側では III 層の堆積が良好な状態で残存しており、III 層上面で遺構検出を行っている。

IV a 層は黒褐色砂質土で、1cm 以下の黄色軽石を多く含む硬くしまる。御池軽石の漸移層であると考えられる。遺物は出土していないが、III 層で検出できなかった遺構の検出面である。

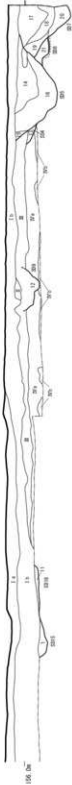
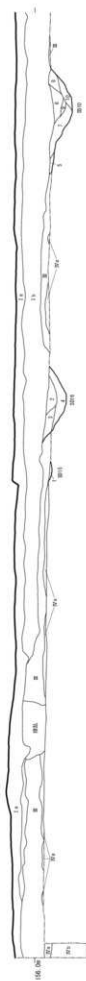
IV b 層は黄色軽石で、霧島御池軽石（Kr-M）である。噴出年代は約 4,600 年前である。調査区周辺では御池軽石の堆積は約 90 ~ 100cm の厚さが確認されている。H25 年度に発掘調査が行われた祝吉第 3 遺跡周辺では約 120cm の堆積が確認されている。

V 層は黒色粘質シルト土で、5mm 以下の黄色軽石および白色軽石を含み、粘性が強い土層である。

VI a 層は黒褐色砂質土で、1cm 以下の橙色軽石を多く含む。鬼界アカホヤ火山灰漸移層であると考えられる。

VI b 層は橙色火山灰で、鬼界カルデラが噴出源の鬼界アカホヤ火山灰層（K-Ah）である。噴出年代は約 7,300 年前である。試掘調査では御池軽石層よりも下位の層を確認しているが、遺物・遺構は検出されていないため、本調査では基本的に IV 層より下位は掘り下げない。

東壁土層断面図 (S=1/80)



西壁土層断面図 (S=1/80)



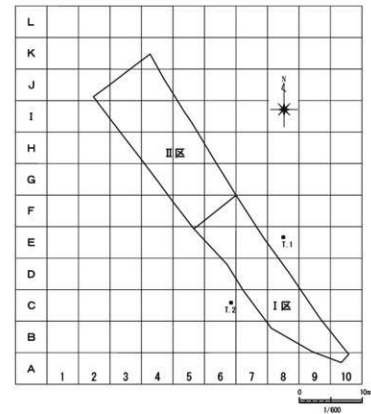
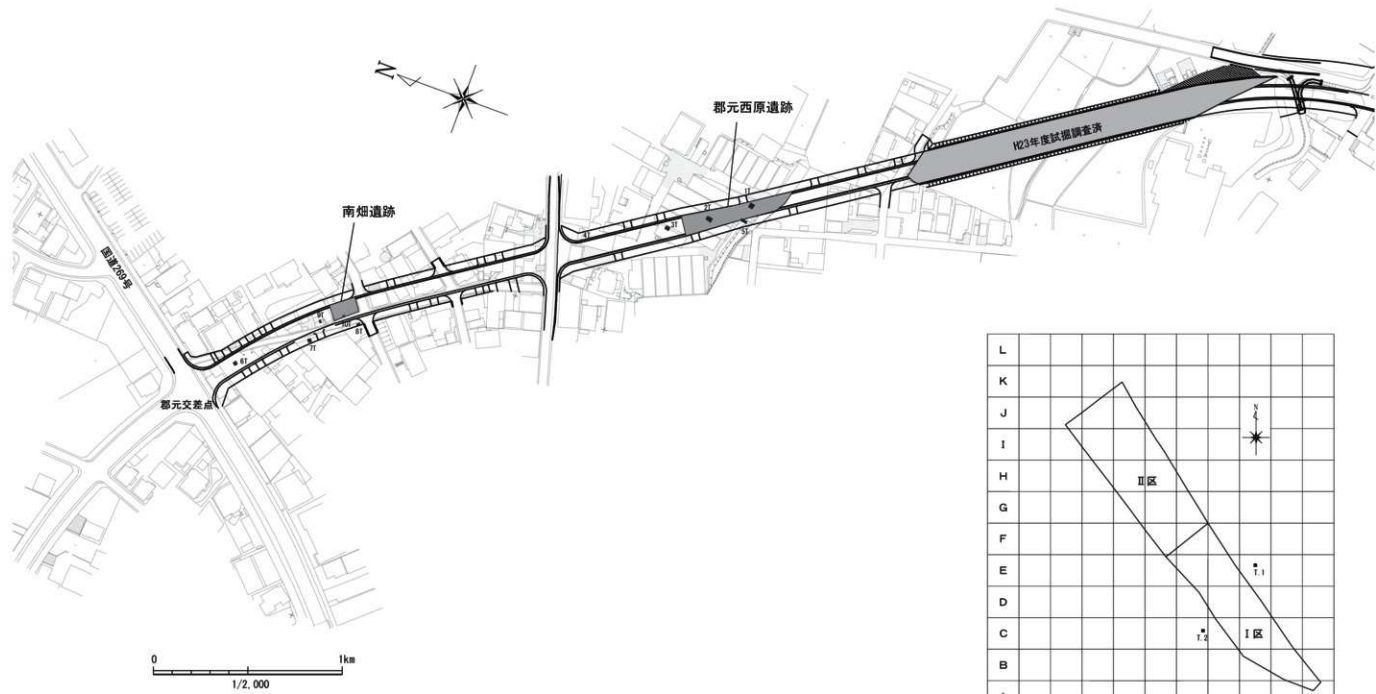
【基本層相説明】

- 1 a: 灰褐色砂質土…10m以下の白色砂石及び黄色砂石を含む(遺構土)
- 1 b: 灰褐色砂質土…5m以下の白色砂石及び10m以下の黄色砂石を多く含む(百脚作土)
- 2: 白色砂石…極少量の黄色砂石をまろへんなく含む
- 3: 白色砂石…極少量の黄色砂石を多く含む(遺構加味砂石層相)
- 4: 黄色砂石…10m以下の黄色砂石を多く含む、硬くする
- 5: 黄色砂石…10m以下の黄色砂石を多く含む

【戻状層相土】

- 1: 黒褐色土…ブロック状の黄色砂石を含む (S315)
- 2: 黒褐色土…10m以下の黄色砂石を多く含む (S316)
- 3: 黒褐色土…2m以下の黄色砂石を多く含む (S317)
- 4: 黒褐色土…3m以下の黄色砂石を多く含む (S318)
- 5: 黒褐色土…5m以下の黄色砂石を多く含む (S319)
- 6: 黒褐色土…10m以下の黄色砂石を多く含む (S320)
- 7: 黒褐色土…10m以下の黄色砂石を多く含む (S321)
- 8: 黒褐色土…10m以下の黄色砂石を多く含む (S322)
- 9: 黒褐色土…10m以下の黄色砂石を多く含む (S323)
- 10: 黒褐色土…2m以下の黄色砂石をわずかに含む、一部ブロック状となる (S324)
- 11: 黒褐色土…2m以下の黄色砂石をまろへんなく含む (S325)
- 12: 黒褐色土…5m以下の黄色砂石をまろへんなく含む (S326)
- 13: 黒褐色土…5m以下の黄色砂石をまろへんなく含む (S327)
- 14: 黒褐色土…5m以下の白色砂石をまろへんなく含む (S328)
- 15: 黒褐色土…10m以下の黄色砂石をまろへんなく含む (S329)
- 16: 黒褐色土…10m以下の黄色砂石をまろへんなく含む (S330)
- 17: 白色砂石…極少量の黄色砂石と1層が混ざる (S331)
- 18: 黒褐色土…極少量の白色砂石を含む、黄色砂石を多く含む (S332)
- 19: 黒褐色土…5m以下の黄色砂石を多く含む (S333)
- 20: 黒褐色土…5m以下の黄色砂石を多く含む (S334)
- 21: 黒褐色土…10m以下の黄色砂石を多く含む (S335)
- 22: 黒褐色土…10m以下の黄色砂石を多く含む (S336)
- 23: 黒褐色土…2m以下の黄色砂石を多く含む (S337)
- 24: 黒褐色土…5m以下の黄色砂石を多く含む (S338)
- 25: 黒褐色土…5m以下の黄色砂石を多く含む (S339)
- 26: 黒褐色土…5m以下の黄色砂石を多く含む (S340)
- 27: オリーブ黒褐色土…ブロック状の黄色砂石を含む (S341)
- 28: オリーブ黒褐色土…2mより厚い砂層で、10m以下の黄色砂石を少量含む (S342)
- 29: (S343)
- 30a: 灰褐色土…10m以下の黄色砂石及び白色砂石を含む (S344)
- 30b: 灰褐色土…10m以下の黄色砂石をまろへんなく含む (S345)
- 31a: 灰褐色土…白色砂石を含む (S346)
- 31b: 灰褐色土…極少量の黄色砂石を多く含む (S347)
- 31c: 白色砂石…極少量の黄色砂石を含む (S348)
- 32: 黒褐色土…10m以下の黄色砂石を多く含む (S349)
- 33: 黒褐色土…10m以下の黄色砂石を多く含む (S350)
- 34: 黒褐色土…20m以下の黄色砂石を大量に含む (S351)
- 35: 黒褐色土…20m以下の黄色砂石を大量に含む、黄色土が混じる (S352)
- 36: 黒褐色土…1層で、3m以下の黄色砂石を大量に含む (S353)
- 37: 黒褐色土…10m以下の黄色砂石を多く含む (S354)
- 38: 灰褐色土…10m以下の黄色砂石をまろへんなく含む (S355)

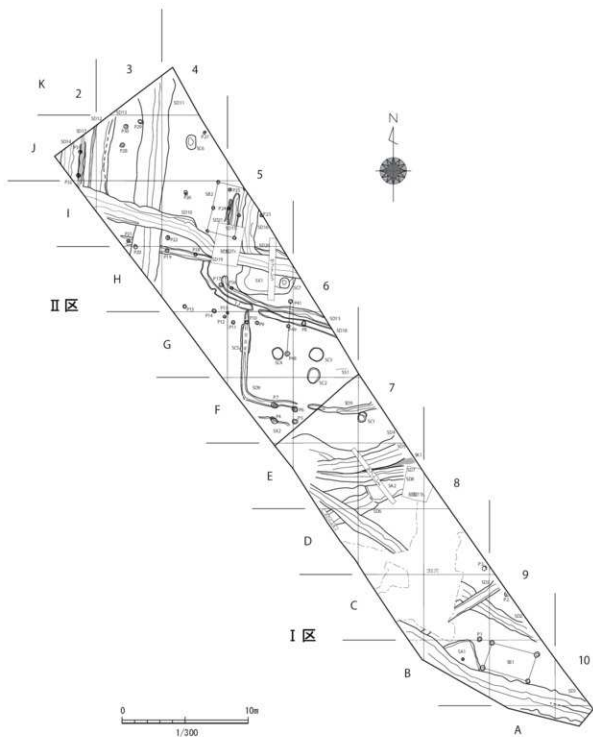
第3図 土層断面図 (S=1/80)



第4図 発掘調査地点 (S=1/600 1/2,000)

第3節 検出遺構

郡元西原遺跡の調査で検出された遺構は、竪穴状遺構2基、掘立柱建物跡2棟、土坑7基、溝状遺構22条、礎集積遺構1基、その他ピット、不明遺構が検出されている（第5図）。今回の調査で検出された遺構はすべて中世の遺構であると考えられるが、遺構内遺物の出土がほとんど見られず、詳細な時期については不明である。また、今回の調査で検出した遺構として、溝状遺構が特出している。郡元地区では、これまで多くの遺跡で中世～近世にかけての溝状遺構を検出しており、他遺跡との関連も考慮しながら時期比定を行っていきたい。以下、遺構ごとに報告を行う。



第5図 郡元西原遺跡遺構配置図 (S=1/300)

(1) 竪穴状遺構 (SA)

竪穴状遺構についてはⅠ区において2基が検出されている。ともに溝状遺構に切られており、遺物も出土していないため、遺構の全容は不明確である。

SA1 1号竪穴状遺構 (第6図)

SA1は調査区南側B-8区で検出されており、SD1に切られているため、遺構全体の様相は不明である。長軸2.5m×短軸1.6m+ α 、検出面からの深さはおよそ20cmを測り、方形を呈すと思われる。遺構内の埋土は一律で、1cm以下の黄色軽石を多く含んだ黒色砂質土である。遺構床面では中央部でピットが1基検出されている。直径約23cm、深さ約30cmの小ピットでSA1に伴うものであると考えられるが、1基のみのためSA1の構造については不明確である。遺構内出土物については確認されておらず、炭化物なども確認できなかった。

SA2 2号竪穴状遺構 (第6図)

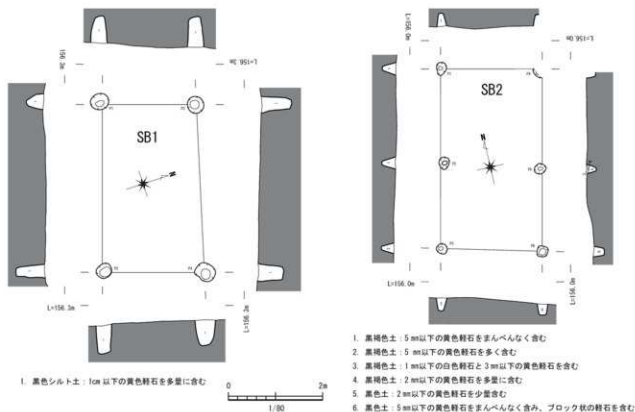
SA2は調査区E-7区のSD4～SD8が並走しているところで検出されており、SD8に切られている。またSD6とも切り合っていると考えられるが、深さがほぼ同じで埋土も類似していることから切り合いの前後が不明であり、一連の遺構である可能性も考えられる。長軸3.0m+ α ×短軸1.6m+ α 、検出面からの深さはおよそ23cmを測る。埋土は一律で、1cm以下の黄色軽石を含む黒褐色土で砂質である。SA1と同様の埋土であると考えられる。SA2については、周辺からピットが検出されておらず、また遺構内出土遺物も確認されていない。SA1同様、炭化物なども確認できなかった。

(2) 掘立柱建物跡 (SB)

掘立柱建物跡は調査区Ⅰ区から1棟、Ⅱ区から1棟の計2棟検出されており、Ⅱ区からは柵列と考えられるピット列が1棟検出された。2棟の掘立柱建物跡は主軸方向で見ると、SB1は東西方向、SB2は南北方向である。ピット列については南北方向に並んでいる。いずれの遺構からも出土遺物は確認されていない。



第6図 SA1・SA2 実測図 (S=1/40)



第7図 SB1・SB2 実測図 (S=1/80)

SB1 1号掘立柱建物跡 (第7図)

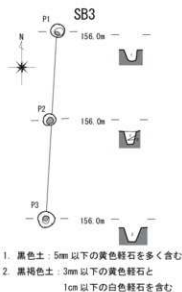
SB1は調査区南側B-8・9区で検出された桁行1軒(3.75m)、梁行1軒(2.18m)で総面積8.18㎡の掘立柱建物跡である。東西方向に主軸をとる。検出面からの柱の深さは53～64cmを測り、柱穴は直径20cm前後である。すべてのピットにおいて埋土は単一で、黄色軽石を多量に含む黒色シルト土である。

SB2 2号掘立柱建物跡 (第7図)

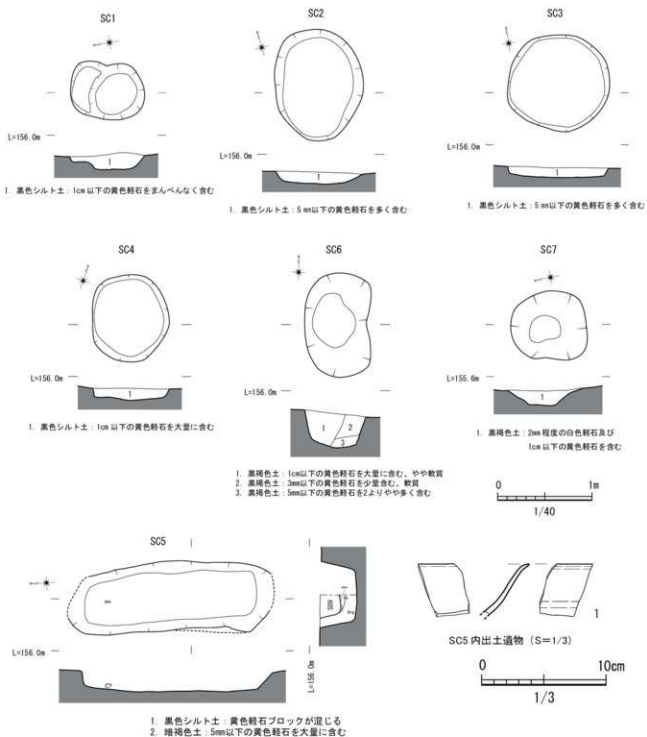
SB2は調査区北側1-4・5区で検出された桁行2軒(3.8m)、梁行1軒(2.15m)で総面積8.17㎡の掘立柱建物跡である。柱間距離は桁行1.8～2.0cmを測り、南北方向に主軸をとる。検出面からの柱の深さは18～29cmを測り、柱穴の直径は13cm前後であり、SB1と比べると柱の径の大きさ・深さともに小規模であるが、桁行梁行と総面積についてはほぼ同規模の掘立柱建物跡であり、同時期の建物跡である可能性が示唆される。ピット内の埋土については黄色軽石の入り方に若干の違いがあるが概ね黒色土が堆積している。P5については分層が可能であり、埋土上層には白色軽石が混在した層が認められた。

SB3 ピット列 (第8図)

SB3はG・H-5区から検出されたもので、播列の可能性が考えられるピット列である。掘立柱建物跡となる東西方向の並びが確認されなかったことから、播列として報告を行うこととする。柱間距離は平均2mを測り、南北方向に主軸をとる。検出面からの柱の深さは27～30cm、柱穴は直径26～37cmを測る。ピット内の埋土については、黄色軽石の入り方で若干の土色の違いはあるが、概ね黒色土である。P2の埋土には黄色軽石に加えて白色軽石も認められる。SB3の特徴としては、すべての柱穴の床面に部分的に硬化した面が認められる点である。こうした特徴が認められるピットはその他3基(P2・P35・P37)があるが、いずれもSB3のように並ぶような配置は認められなかったため、今回は単独のピットとして報告を行った。



第8図 SB3 実測図 (S=1/80)



第9図 土坑および土坑内出土遺物実測図 (S=1/3 1/40)

(3) 土坑 (SC) (第9図)

土坑は計7基検出されており、I区で1基、II区で6基が検出されている。SC5を除くと、概ね円形の土坑で検出面からの深さは比較的浅いものが多い。SC5を除くと、概ね円形の土坑で検出面からの深さは比較的浅いものが多い。

SC1 1号土坑

SC1はF-7区で検出された土坑で、長径78cm×短径56cm、深さ約16cmを測る。土坑の北側は段掘りとなっており、検出面から約5cmでさらに深く掘り込まれている。埋土は単一で黄色軽石を含む黒色シルト土である。遺物は出土していない。

SC2 2号土坑

SC2はF・G-6区で検出された土坑で、長径119cm×短径93cm、深さ約12cmを測る楕円形を呈す。埋土は単一で黄色軽石を多く含む黒色シルト土である。遺物は出土していない。

SC3 3号土坑

SC3はG-6区で検出された土坑で、直径約118cm、深さ10cmを測るほぼ円形の土坑である。埋土はSC2と同様で黄色軽石を多く含む黒色シルト土である。遺物は出土していない。

SC4 4号土坑

SC4はG-5区で検出された土坑で、長径95cm×短径81cm、深さ約13cmを測る楕円形を呈す。埋土は単一で黄色軽石を大量に含む黒色シルト土である。遺物は出土していない。

SC5 5号土坑

SC5はG-5区で検出された土坑で、長軸213cm×短軸72cm、深さ約38cmを測る長円形を呈す。SC5は上にSD9が並行して走っており、残存状況は悪い。遺構上部がSD9に切られているため、埋土の詳細な状況は不明確であるが、上部に黄色軽石のブロックが混じる黒色シルト土、下部に黄色軽石を大量に含む暗褐色土が堆積している。出土遺物については、床面から白磁が1点出土しており、1は太宰府分類白磁碗V類の口縁部と考えられる。SC5については土坑の形態などから土坑墓の可能性が考えられる。

SC6 6号土坑

SD6は調査区北側J-4区で検出された土坑で、長軸110cm×短軸71cm、深さ36cmを測り楕円形を呈す。埋土は黒褐色土で黄色軽石の含有量の違いによって3つに分層することができるが、他の土坑に比べて含まれる黄色軽石が非常に多いという特徴をもつ。遺物は出土していない。

SC7 7号土坑

SD7はH-5区で検出された土坑で、長軸80cm×短軸70cm、深さ18cmを測る。SC7はSX1の掘り下げを行っているところで検出されたため、SX1に伴う土坑の可能性も考えられる。埋土は黒褐色土で黄色軽石に加えて白色軽石が含まれている。遺物は出土していない。

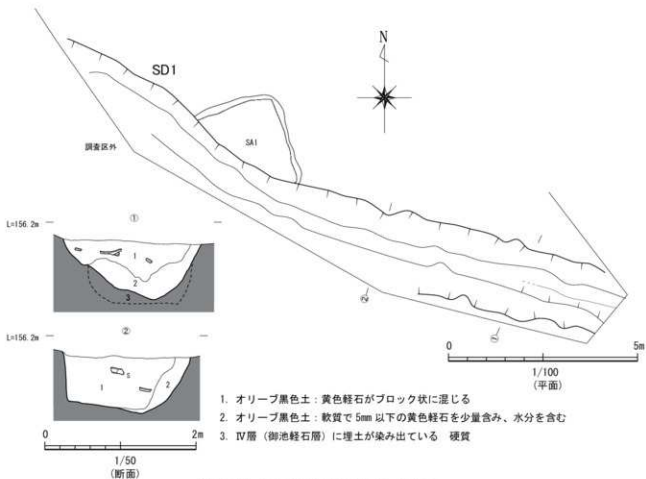
(4) 溝状遺構 (SD)・道路状遺構 (SK)

本遺跡では溝状遺構が最も多く検出されており、道路状遺構と思われるものも含めると、計22条検出されている。調査区の場合によっては、御池軽石漸移層より上位が大幅に削られているために浅い溝状遺構も多く、また並走する溝も多く見られるため切り合いが激しく、詳細が不明なものも多い。硬化面を持つ溝は3条見つかったり、道路状遺構の可能性も考えられる。以下、それぞれの溝状遺構について報告する。

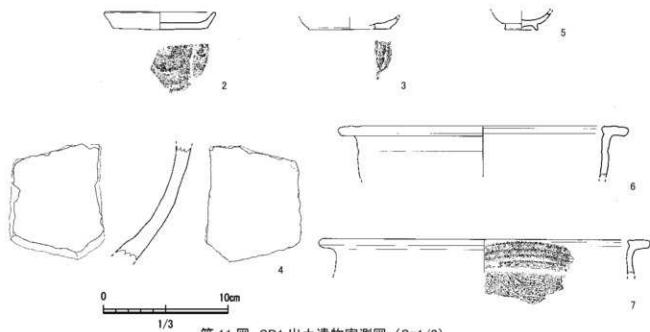
SD1 1号溝状遺構 (第10図・第11図)

SD1はA～C-7～10区を南東～北西方向に延びる溝状遺構で、長さ約16m、幅約182cm、深さは最大で83cmを測る。埋土には現代の瓦片から中世の土師器などが混在する形で出土しており、遺物と一緒にビニール袋なども入り込んでいた。埋土については他の遺構に比べて土質が違い、御池軽石がブロック状に混ざっている。埋土断面を観察すると、2層・3層は水分を含んでおり、埋土であるオリブ黒色土が壁面の御池軽石に染み出している状態が見受けられる。また、埋土断面②では埋土1層が2層を切るような状態で堆積しており、断面①では明らかに溝の形状が異なることが分かる。これらの埋土の状態や溝の形状から、溝廃棄後、機械などで穴を掘り、溝部分にゴミなどを廃棄した可能性が考えられる。

遺構内出土遺物については上記した何らかの掘削の影響により、現代の瓦と中世の土師器や陶磁器、さらに近世の薩摩焼などが混在して出土する状況であった。ここでは遺構内出土遺物としてまとめて掲載を行う。2・3は土師器の小皿である。2は口径8.6cm、底径7.4cm、器高1.4cmを測る。底部切り離しはヘラ切りである。3は底径6.4cmを測る。口縁部は欠損しているが、口径7.8～8.0cm、器高1cm前後を測ると推察される。底部切り離しはヘラ切りである。4は常滑焼の胴部片である。器面調整は内外面ともに丁寧なナデ調整であり、内面には自然釉が認められる。5は灰釉陶器の小型碗である。底径2.5cmを測る。皿付～高台内は無軸である。産地は不明であるが、近世～近代と考えられる。6・7は薩摩焼の口縁部片である。6は鉢で口径22.8cmを測り、7は播鉢で25.9cmを測る。口唇部は軸刺ぎされている。どちらも苗代川系薩摩焼で、18世紀代のものである。



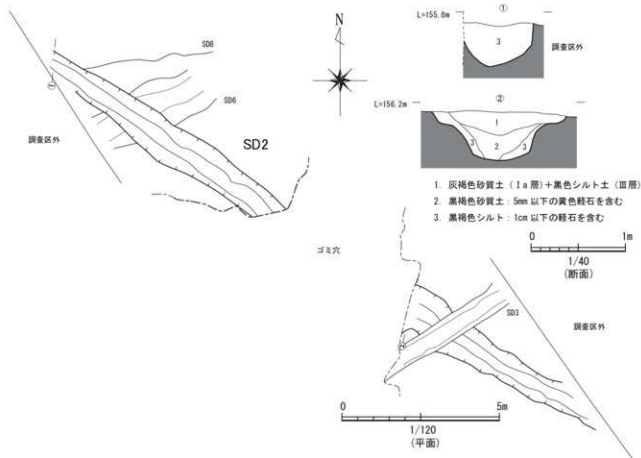
第10図 SD1 実測図 (S=1/50 1/100)



第11図 SD1 出土遺物実測図 (S=1/3)

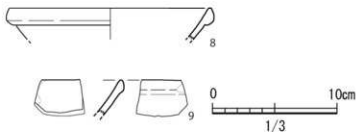
SD2 2号溝状遺構 (第12図・第13図)

SD2はC～E-6～9区を南東～北西方向に延びる溝状遺構で、SD1の東側を並走している。長さ約21m、幅約142cm、深さ約50cmを測る。I区の中央部は現代の廃棄物を埋めた穴(以下、ゴミ穴)があり、SD2はこのゴミ穴に大きく切られている。切り合い関係は、SD3に切られており、SD6・SD8を切っている。埋土は黒褐色シルト土が両壁際から流れ込むように堆積し



第12図 SD2実測図 (S=1/40 1/120)

ており、中央部に黒褐色砂質土、その上部に灰褐色土が堆積している。遺構北西側では黒褐色シルト土が単一で堆積している。遺構内出土遺物については白磁を2点図化した。8・9は白磁碗の口縁部片で、8は口径16.0cmを測る。大宰府分類白磁碗Ⅳ類に分類される。いずれも流れ込みによる遺物と考えられる。



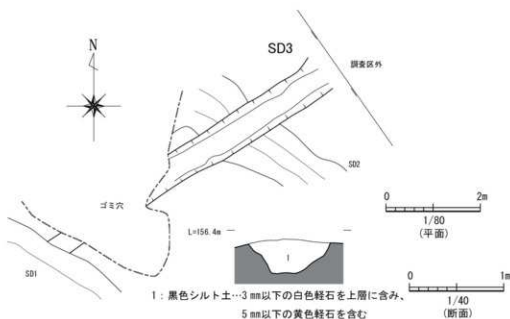
第13図 SD2出土遺物実測図 (S=1/3)

SD3 3号溝状遺構 (第14図)

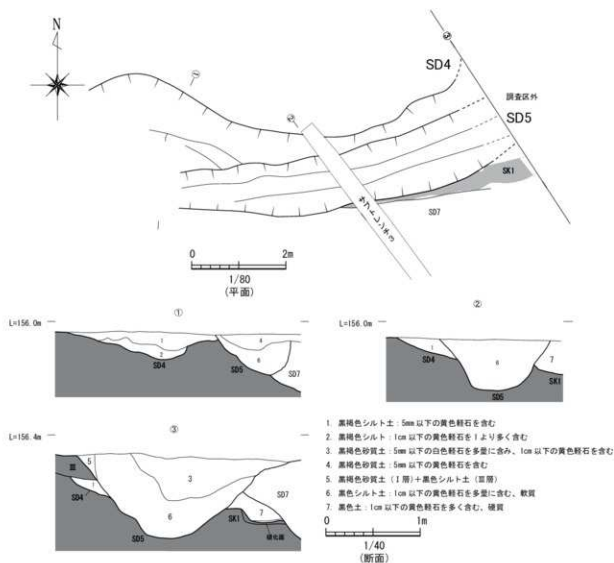
SD3は調査区南側C-8・9区を北東-南西方向に延びる溝状遺構である。SD3はゴミ穴とSD1に切られており残存状況が悪く、長さ約7m、幅86cm、深さは最大で36cmを測る。検出面はⅢ層上面である。埋土は黒色シルト土で、上面には分層できていないが白色軽石を含んでいる層が認められる。SD3は他の溝状遺構の中でも比較的上からの検出が可能であった溝の一つで、埋土についてはⅢ層の土であると考えられる。SD3から遺物は出土していない。

SD4・SD5 4号・5号溝状遺構 (第15図)

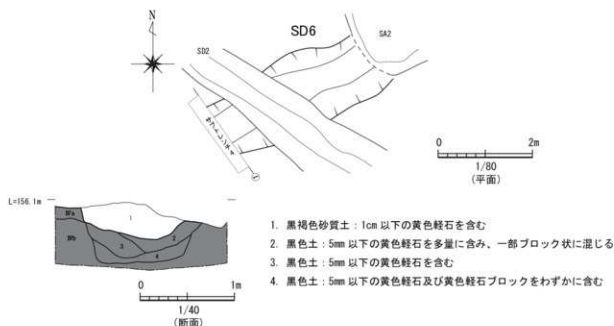
SD4・SD5はE-6・7区を東西方向に延びる溝状遺構である。SD4はSD5に切られており、北側の上場のみ検出することができ、西側では一部床面を検出できた。長さ約9m、深さ約30cmを測る。SD5は長さ約7.5m、幅81～118cm、深さ約53cmを測る溝状遺構である。SD4・SD7・SK1を切っており、この並走する溝状遺構の中では最も新しい溝である。検出面はⅣa層上面であったが、東壁土層では溝の掘り込み面を確認することができ、Ⅲ層上面が本来の遺構の掘り込み面であった。また、埋土3には白色軽石を多量に含んでいることが分かった。遺構内出土遺物については、SD4からは出土していない。SD5からは土師器の小片が1点出土している。



第14図 SD3実測図 (S=1/40 1/80)



第15図 SD4・SD5実測図 (S=1/40 1/80)



第16図 SD6実測図 (S=1/40 1/80)

SD6 6号溝状遺構 (第16図)

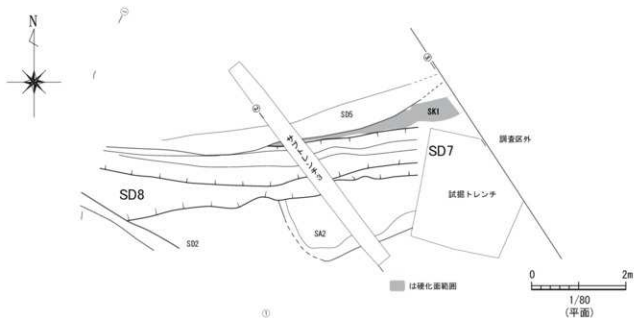
SD6はD・E-6・7区を東西方向に延びる溝状遺構である。SD6はSD2に切られており、長さ約3.5m、幅約112cm、深さ約37cmを測る。SD6はSA2とも切り合い関係があるが、深さ・遺構内埋土が類似しており、遺構内で遺物も出土していないことからSA2との関係は不明確である。また、断面については調査区南壁の実測を行ったが、SD6の断面の下にさらに遺構のような断面が認められた。しかし、平面的にはSD6以外に遺構が検出されていないため詳細については不明であるが、調査区の東側に延びる遺構がある可能性が示唆される。SD6からは遺物は出土していない。

SD7・SD8・SK1 7号・8号溝状遺構・道路状遺構 (第17図・第18図)

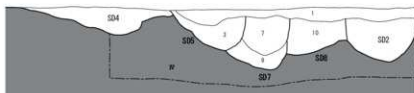
SD7・SD8は調査区E-6・7区を東西方向に延び、SD4・SD5と並走する溝である。検出面はIV a層上面であるが、本来の遺構の掘り込みはSD5同様、SD7・SD8はIII層上面である。SK1については切り合いが激しく不明である。

SD7は長さ約7m、幅約97cm、深さは最大で80cmを測り、SD5に一部切られている。遺構内埋土としては、最上層に板島文明軽石が厚い部分で62cm堆積しているが、表土が混ざった状態であり、堆積しているのは東側の一部分のみである。最下層には黄色軽石を少量含む黒色土が堆積しており、粘質土である。SD7は埋土の状況より試掘調査の際に1トレンチの壁際で検出された溝であると考えられる。遺構内出土遺物については、10点の取り上げを行っており、そのうち6点を掲載した。10は土師器坏である。底径10.4cmを測る。底部に板状圧痕が認められる。11は小皿である。口径9.4cm、底径8.3cm、器高1.0cmを測る。底部切り離しはヘラ切りである。12は東播系須恵器の捏鉢である。底部片で底径9.8cmを測る。13については試掘調査の際に出土したもので、東播系須恵器甕の口縁～頸部片である。口径は推定32.8～33.0cmを測ると考えられ、外面の器面調整はナメ方向のタキヤ後ヨコナデ調整を行っている。14は青磁碗の底部で、底径5.8cmを測る。高台内は露胎しており、龍泉系青磁碗Ⅱ類に分類される。15は粘土塊である。スサ状の跡が認められ、何らかの建築部材の一部と考えられる。

SD8はSA2を切って、北側はSD7に切られており、南側の上場のみ検出することができた。長さは約6mで深さは約39cmを測る。埋土は単一層で黄色軽石を多量に含む、やや硬質の黒褐色シルト土である。遺構内出土遺物については滑石製品が出土している。16は滑石製品である。長さ2.5cm程度の小片で、外面にはススの付着が認められ、石鍋の転用品の可能性が考えられる。内面は意識的にすばまった形状となっている。

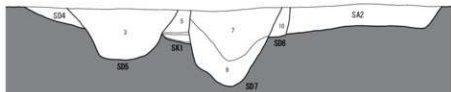


L=156.2m



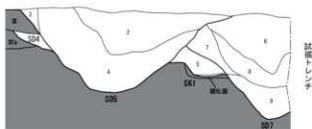
②

L=156.0m



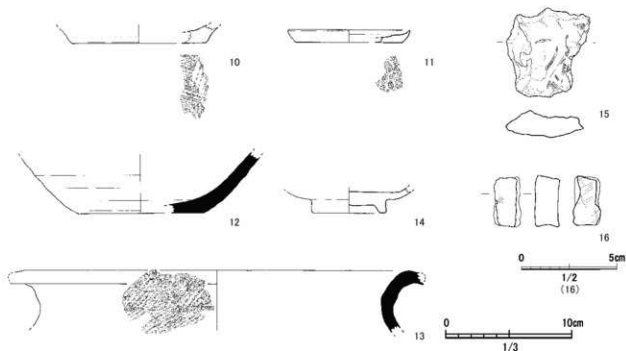
③

L=156.4m



1. 黒褐色砂質土：5mm以下の黄色軽石を含む
2. 黒褐色砂質土：5mm以下の白色軽石を多量に含み、1cm以下の黄色軽石を含む
3. 黒褐色砂質土（I層）+黒色シルト土（II層）
4. 黒色シルト土：1cm以下の黄色軽石を多量に含む、軟質
5. 黒色土：1cm以下の黄色軽石を多く含む、硬質
6. 白色軽石にI層が混じる
7. 黒色砂質土：5mm以下の白色軽石・黄色軽石を極少量含む、軟質
8. 黒色土：5mm以下の黄色軽石を含む、7よりも硬質
9. 黒色土：5mm以下の黄色軽石を少量含む、粘質土
10. 黒褐色シルト：1cm以下の黄色軽石を多量に含む、やや硬質（5と類似）

第17図 SD7・SD8・SK1 実測図 (S=1/40 1/80)



第 18 図 SD7・SD8 出土遺物実測図 (S=1/3)

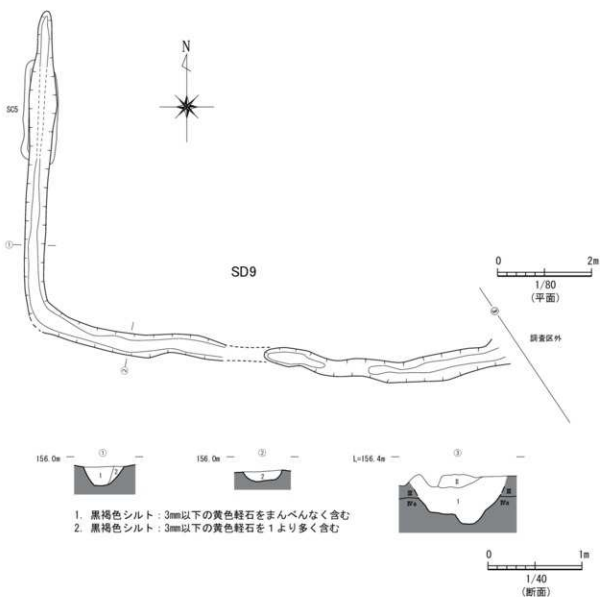
SK1はSD5とSD7に切られており詳細については不明であるが、2つの溝を掘っている途中で間から硬化面が出てきたため、検出された道路状遺構である。検出した長さは約4.5mであるが、同レベルで西側にも硬化面が検出されているため、本来は西側に延びる遺構であったと考えられる。深さは35cm程である。また、遺構壁の外側には細く黒色土が確認でき、掘り形であると考えられる。硬化面については約2cmの厚さを測る。調査区東側では硬化面は1枚しか確認されなかったが、サブトレンチ3の部分では高さの異なる2枚の硬化面が確認されている。西側では部分的にしか硬化面が見られなかったため、下の硬化面がSK1に伴うものであるかについては不明である。SK1からの出土遺物は軽石加工品が1点出土している。

SD9 9号溝状遺構 (第19図)

SD9は調査区中央部F・G-5～7区で検出され、長さ約17m、幅40～86cm、深さは最大で30cmを測る浅い溝である。検出面はⅢ層上面である。切り合い関係は北側でSC5を切っている。調査区東側からくの字状にほぼ直角に曲がり、SD18にぶつかる直前で終息する。検出面からは非常に浅いため、部分的に切れている箇所が見られる。遺構内埋土は一様で黒色シルト土である。検出面からは深さが浅かったものの、調査区東壁を観察すると、溝の掘り込み面は検出面より上部であったと考えられ、東壁の断面では深さが最大の30cmを測る。また、埋土の上には松島文明軽石が堆積しており、溝が埋まる過程で落ち込み部分に堆積したと考えられる。埋土についてはSD3と類似しており、Ⅲ層の土であると考えられる。遺構内出土遺物は土師器片が数点出土しているが、いずれも小片のため時期比定は困難である。

SD10 10号溝状遺構 (第20図・第21図)

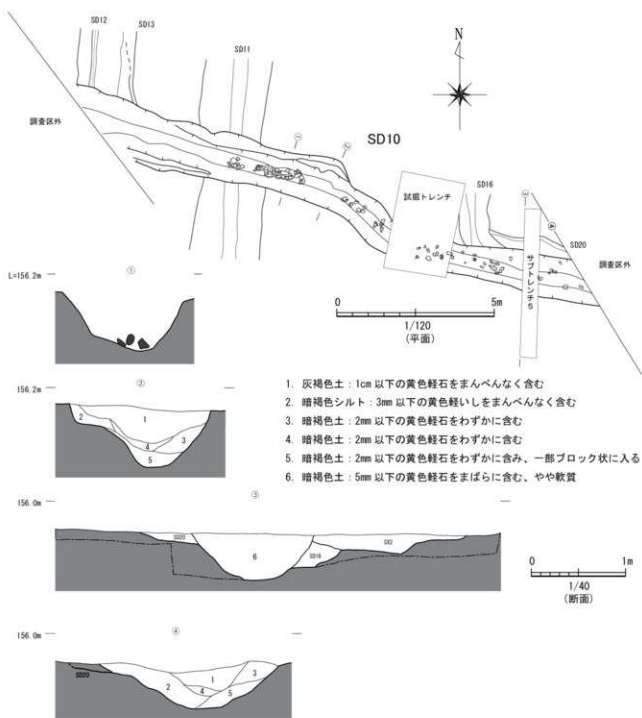
SD10は調査区北側H・I-2～6区で検出された東西方向に延びる溝で、長さ約17m、幅約150cm、深さ約62cmを測る溝である。検出面はⅢ層上面である。中央付近で蛇行している。SD10はⅡ区で検出された多くの溝状遺構と切り合い関係にあるが、全ての遺構を切っており、比較的新しい溝であると考えられる。また、溝の床面には礫が検出されており、西側にはなく、中央付近に集中しており東側に行くとほど散在しているという状態が窺える。礫の中には土師器も数点混在しており、溝が廃棄された段階で溝の中央部に礫を廃棄し、東側に散在していったと考えられる。遺構内埋土は他の溝よりも比較的明るい暗褐色土が堆積している。切り合い関係と埋土の状況からも新しい溝であることが窺える。遺構内出土遺物は土師器・陶磁器ともに出土している。17は土師器杯の口縁～胴部片である。器面調整は回転ナデであるが、口唇部はナデられて平坦になっている。18は試掘調査の際に出土したものである。青磁碗の底部で、底径6.2cmを測る。龍泉窯系青磁碗Ⅳ類または上田分類のD類に分類される。19は粘土塊である。SD7で出土したものと同様、スサの跡が認められる。20は砥石である。全ての面に磨痕が認められる。



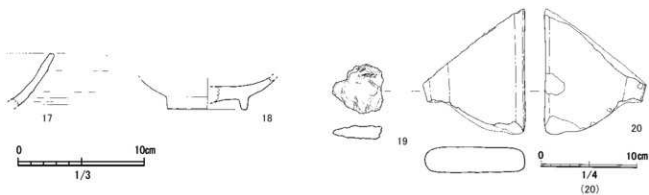
第 19 図 SD9 実測図 (S=1/40 1/80)

SD11 11号溝状遺構 (第22図・第23図)

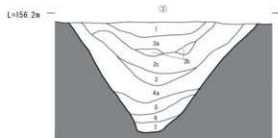
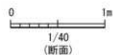
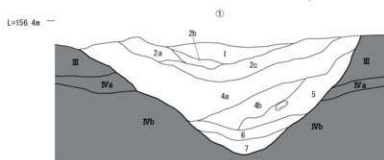
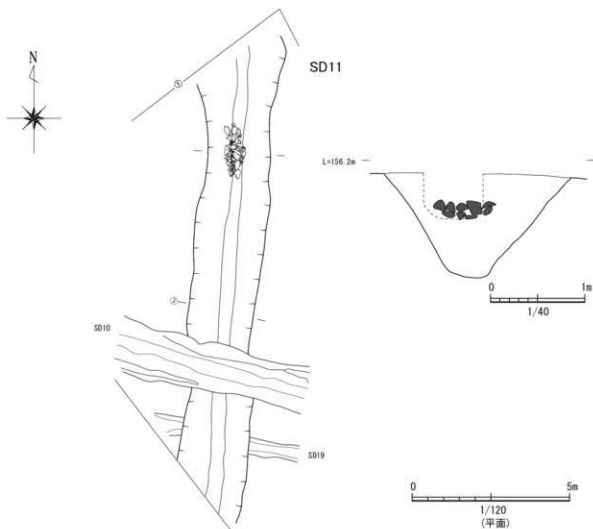
SD11は調査区北側H～K-3区で検出された溝で調査区を直線的に南北方向に延びる溝であり、今回検出された溝の中で最大の大きさである。検出面はⅢ層上面で、長さ約15m、幅約2m、深さは最大で116cmを測る。切り合い関係についてはSD10に切られており、SD19を切っている。SD11にも埋土上位から文明軽石が約40cm堆積しており、場所によって文明軽石の1次堆積と2次堆積が明確に分層できるほどの堆積状況が窺える。深さとしては本遺跡で検出された溝の中では最も深く1mを越えており、床面から約20cm上で湧水を確認している。SD11においても礫が集中して検出されており、文明軽石直下で検出された。礫の中には土師器や軽石、鉄滓も混在して出土している。SD10で検出された礫と類似する楕円形の丸石であり、同時期に廃棄されたものであると考えられる。遺構内出土遺物については、土師器の底部片や青磁などが出土した。しかし、小片が多かったため、底部片2点のみ掲載した。21・22は土師器環の底部片である。21は底径9.4cmを測る。2点とも底部切り離しは系切りである。23は砥石である。一部敲打痕も認められる。24～26は軽石加工品で、24は礫集中から出土している。いずれも1～2面の表面に磨面が形成されている。26は赤色系の粘土と考えられる付着物が認められる。27～30は主に礫集中から出土した鉄滓である。また、今回掲載していないが、SD11埋土内からも滑石製品の破片が出土している。



第20図 SD10実測図 (S=1/40 1/80)

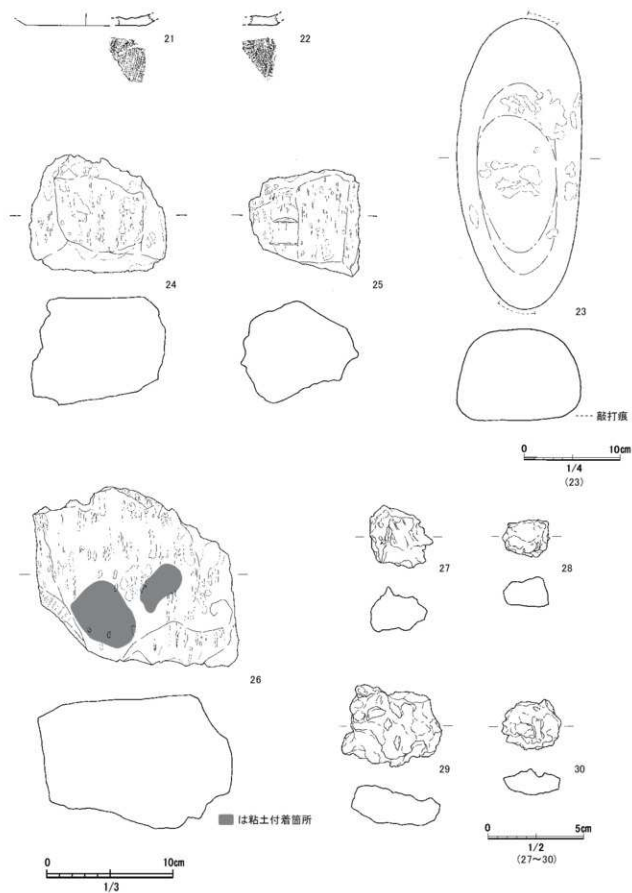


第21図 SD10出土遺物実測図 (S=1/3)

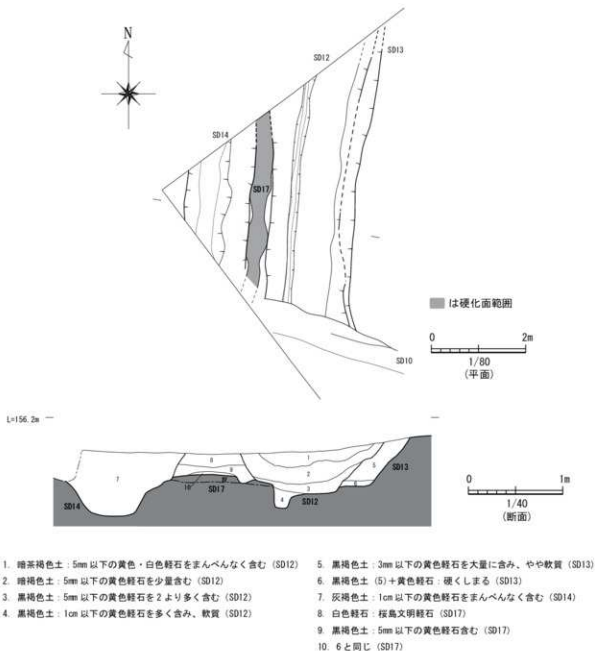


1. 灰褐色土：1cm以下の黄色・白色軽石を含む
- 2a. 灰褐色土（1層）+白色軽石（2c）
- 2b. 白色軽石（桜島文明軽石二次堆積）
- 2c. 白色軽石（桜島文明軽石）
3. 黒褐色土：1cm以下の黄色軽石を含み、粘性あり
- 4a. 黒褐色シルト：1cm以下の黄色軽石を含む
- 4b. 黒褐色シルト土：1cm以下の黄色軽石を含み、硬質
5. 黒褐色土：1cm以下の黄色軽石を多く含む
6. 暗褐色土：2cm以下の黄色軽石を大量に含む
7. 暗褐色土：2cm以下の黄色軽石に黒色土が混じる

第22図 SD11実測図 (S=1/40 1/120)



第 23 図 SD11 出土遺物実測図 (S=1/2 1/3)

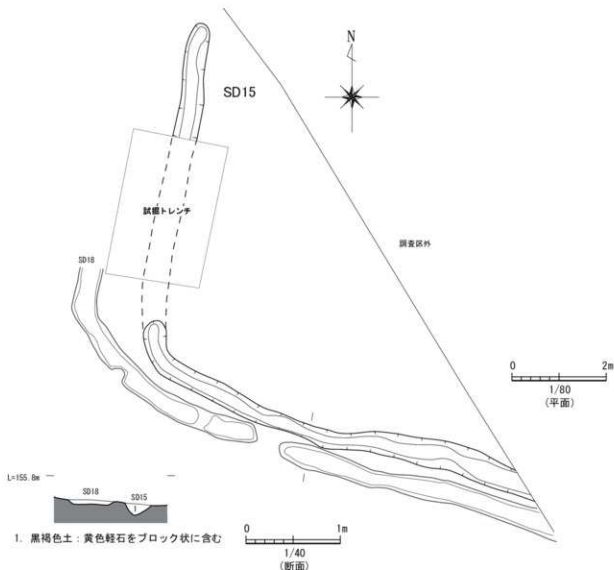


第24図 SD12・SD13・SD14・SD17実測図 (S=1/40 1/80)

SD12・SD13・SD14・SD17 12号・13号・14号・17号溝状遺構 (第24図・第29図)

SD12～14・17は調査区北側1・J・2・3区で切り合いながら並走して検出された溝状遺構である。切り合い関係については、すべての溝がSD10に切られており (SD14については不明)、SD12がSD13とSD17を切っており、SD14がSD17を切っている。検出面はⅢ層上面であるが、SD17は切り合いが激しいため不明である。

SD12は長さ約7m、幅約153cm、深さ45cmを測る。床面西側には深さ20cm程度の細い溝が掘り込まれている。埋土については4枚に分層することができ、上位層には白色軽石が含まれている。遺構内出土遺物はほとんど確認されていないが、青磁の底部片及び軽石加工品が出土している。31は青磁碗で底径5.3cmを測る。龍泉窯系青磁碗Ⅳ類または上田分類のD類に分類される。32は軽石加工品で、2面表面に磨面を形成しているもので、棒状に整形されていた可能性がある。



第 25 図 SD15 実測図 (S=1/40 1/80)

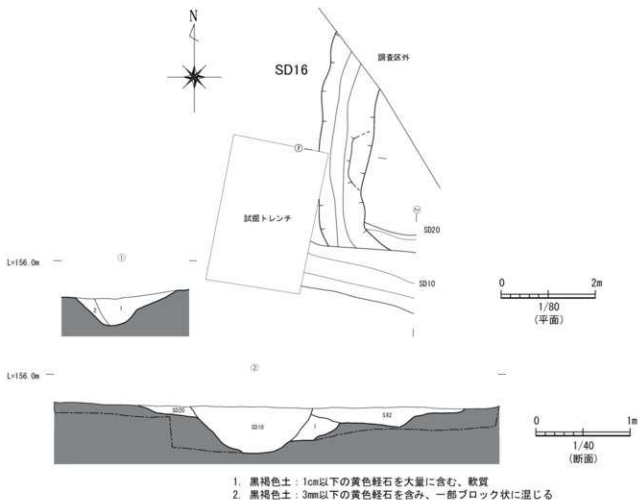
SD13はSD12に切られており、東側の上場のみ検出することができた。長さは約8m、深さは43cmを測り、床面には硬く縮まる硬化面が貼られている。硬化面の厚さは6cm程である。SD12に切られているため、硬化面の幅なども不明である。遺構内埋土は単一層で黄色軽石を大量に含んだ黒褐色土である。SD13からは遺物は出土していない。

SD14は長さ約2m、幅約141cm、深さは最大で68cmを測る。埋土は一律で灰褐色土であり、一度に埋め戻されたような状況である。SD14からは遺物は出土していない。

SD17はSD12とSD14に切られているため、遺構の形状については不明であるが、長さ約4m、深さ約21cmを測る。埋土には上位に桜島文明軽石が10cm程度堆積しており、床面には硬く縮まる硬化面が貼られている。硬化面の厚さは3cmほどで、SD14やSD12よりも浅い溝である。SD17からも遺物は出土していない。

SD15 15号溝状遺構 (第25図)

SD15は調査区北側H・I-5・6区で検出された溝で、検出面はIV a層である。くの字状に屈曲する溝で長さ約15m、幅約27cm、深さ13cmを測る。切り合い関係はなかった。検出面からは浅いため、部分的に切れている箇所が見られ、また試掘調査の際にはSD15は検出することができなかった。遺構内埋土は一律で黄色軽石をブロック状に含む黒褐色土である。SD15の左隣にSD18が並走するように走っている。SD15から遺物は出土していない。



第26図 SD16実測図 (S=1/40 1/80)

SD16 16号溝状遺構 (第26図・第29図)

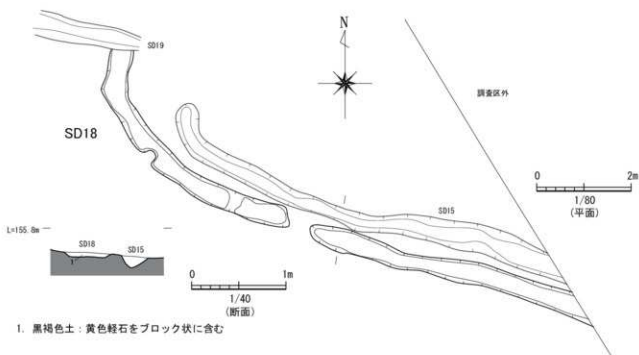
SD16は調査区北側H・I-5区で検出された溝で、検出面はIV a層である。長さ約4m、幅約107m、深さ約28cmを測る。切り合い関係はSD10に切られており、SD20を切っている。SD10に切られる部分で屈曲し始めるため詳細は不明確であるが、断面観察用に入れたサブトレンチでSD10とSX2に切られているものの断面が確認されることから、SD15やSD18同様、くの字状に屈曲するようである。埋土については、黄色軽石の含有量の違いから分層できるが、黒褐色土が堆積している。遺構内出土遺物については青磁が1点出土している。33は青磁の稜花タイプの皿の口縁部片である。龍泉窯系の明代の皿である。

SD18 18号溝状遺構 (第27図)

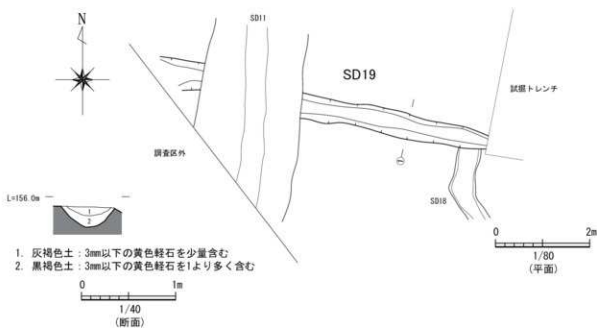
SD18は上述したSD15と並走している溝状遺構で、検出面はSD15同様、IV a層である。途切れているものの、くの字状に屈曲すると考えられ、長さ約12m、幅約48cmを測り、深さは検出面からわずか5cm程度を測る。埋土は黄色軽石をブロック状に含む黒褐色土で、SD15と同一層である。試掘2トレンチの北側ではSD15の北側には並走するようにSD21が走るが、SD18とSD21は同一溝である可能性も考えられる。しかし、屈曲の仕方がSD15とは若干異なり、またSD21との溝の幅に若干差異があることから、明確に同一溝であるは言えないため、今回は別の遺構として報告を行う。SD18から遺物は出土していない。

SD19 19号溝状遺構 (第28図・第29図)

SD19はH・I-3・4区で検出された溝で、長さ約7m、幅約57cm、深さ約22cmを測る。検出面はIV a層である。SD11に切られており、SD18を切っている。試掘調査のトレンチにかかっているが、試掘では検出されなかったことから、東側は



第 27 図 SD18 実測図 (S=1/40 1/80)

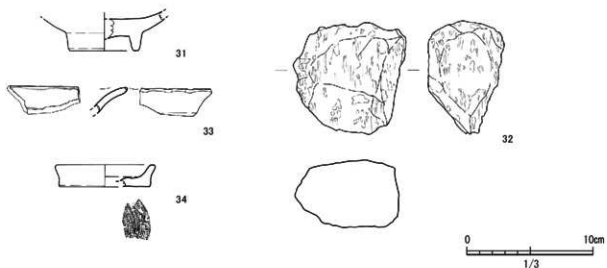


第 28 図 SD19 実測図 (S=1/40 1/80)

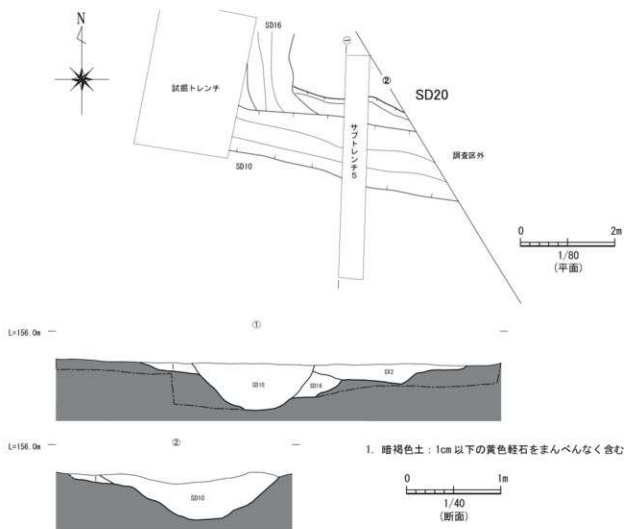
SD10に切られていると考えられる。埋土は2枚に分層でき、黒褐色土の上に灰褐色土が堆積している。遺構内出土遺物については土師器が数点出土している。34は土師器の小皿で口径7.8cm、底径7.2cm、器高1.75cmを測る。底部切り離しはヘラ切りである。

SD20 20号溝状遺構 (第30図)

SD20はH-5区で検出されており、検出面はIV a層である。SD10とSD16に切られているため検出した長さは2.5mほどであり、詳細は不明である。また、試験トレンチでも確認されていない。SD20からは遺物は出土していない。



第29図 SD12・SD16・SD19 出土遺物実測図 (S=1/3)



第30図 SD20 実測図 (S=1/40 1/80)

SD21 21号溝状遺構 (第31図)

SD21は1-5区で検出された溝で、検出面はIV a層である。長さ約2.5m、幅約36cm、深さ約5cmを測る。試掘トレンチにかかっているが、試掘では検出されていない。右隣にはSD15が並走しており、前述したようにSD21はSD18と同一溝の可能性も考えられる。埋土は黄色軽石のブロックを含む黒褐色土であり、SD18と類似した埋土である。SD21から遺物は出土していない。

(5) ビット (Pit) (第32図 第2表)

本遺跡では、掘立柱建物跡が2棟・ビット列1棟しか確認されず、建物跡の一部を構成する柱穴以外の小穴は、単独のビットとして記録している。調査区外に延びる建物跡を構成する柱穴とも考えられるが、今回は直径50cm以下のものは、土坑とは区別してビットとしている。ビットは調査区全体で合計32基検出された。埋土の堆積状況から柱痕跡が認められるビットも存在することから、本来は建物を構成していた可能性があるビットも存在している。以下、埋土が複数層確認されたビットについて個別に報告を行う。個別の図面を掲載していないビットの位置や詳細については第5図および第2表を参照していただきたい。なお、検出したビットはすべてIV a層で検出され、ビットからの出土遺物は確認されなかった。

P14…H-4区で検出されたビットで、直径約39cm、深さ約46cmを測る。P15の次に深さをもつビットである。埋土は3枚に分層することができ、埋土の状況より柱穴であった可能性が高いと考えられる。

P15…H-4区で検出されたビットで、直径約23cm、深さ約54cmを測り、単独のビットの中では最も深さのあるビットである。床面には硬化した面が認められる。埋土は2枚に分層することができ、硬化面と埋土の状況より、柱穴であった可能性が高いと考えられる。

P16…H-5区で検出されたビットで、直径約20cm、深さ約18cmを測る。埋土は黄色軽石の入り方で3枚に分層することができる。

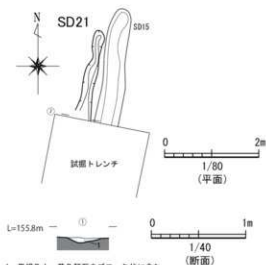
P18…H-4区で検出されたビットで、直径約22cm、深さは最大28cmを測る。埋土は粘性の強い黒色シルト土で、中心には検出面から13cmほどの部分に茶褐色の粘土質な土が堆積していた。

P26…I-4区で検出されたビットで、直径約24cm、深さ約32cmを測る。

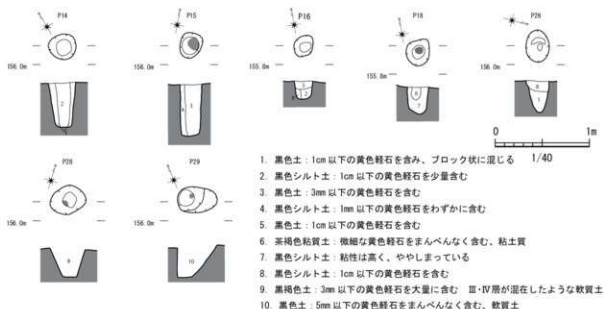
P28…J-3区で検出されたビットで、直径約37cm、深さ約30cmを測る。埋土は単一層で軟質であり、床面には硬化した面が認められる。

P29…J-3区で検出されたビットで、直径約42cm、深さ約32cmを測る。埋土は単一層で軟質である。床面には硬化した面が認められる。

以上、個別に詳細を述べたが、P14とP15については掘立柱建物跡を構成する柱跡である可能性が高い。上記したSB1とSB2については、梁行がそれぞれ2.18m、2.15mとほぼ同幅である。P14とP15についてもビット間の距離が約2.2mを測る。この2つのビットについては、埋土を見ても柱跡の痕跡が残っており、P15については床面に硬化面を有している。これらのことから、2つのビットは建物跡であった可能性が高いが、周辺に建物跡を構成するビットがないため、詳細については不明である。同様にP28とP29についても、ビット間の距離が約2.2mで同程度の幅を有する。そして床面には硬化面をもっていることから、これらのビットは北西方向に軸をもつ建物跡であった可能性が考えられる。



第31図 SD21実測図 (S=1/40 1/80)

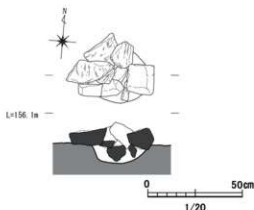


第32図 ピット実測図 (S=1/40)

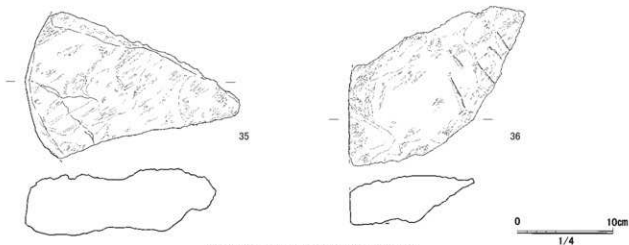
(6) 礫集積遺構 (SS)

SS1 1号礫集積遺構 (第33図・第34図)

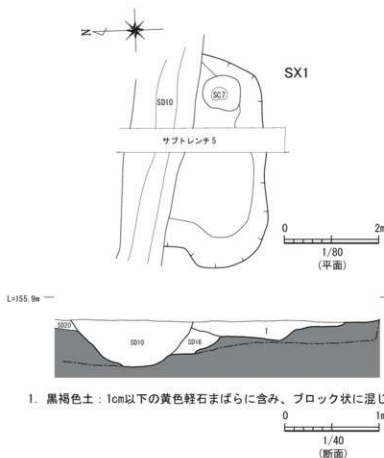
調査区内で、礫集積遺構と考えられる遺構が1基のみ検出された。SS1はG-6区で検出された遺構で、検出面はIV a層上面である。石材は軽石が多く、加えて安山岩が見られる。上位の礫及び軽石を外すと掘り込みが認められ、長軸34cm×短軸28cmの円形の掘り込みが確認された。検出面からの深さは約11cmである。土坑状の掘り込みに下から小さめの礫を入れ、その上に大きな礫及び軽石を意図的に置いたと見られる。また、軽石には加工痕と考えられる面取りも見られたため、軽石2点の実測を行った。35・36は比較的扁平な軽石の側面に磨面を形成している。また36は加工の際の工具痕も認められる。割れが激しいため残存している加工面はわずかであり、詳細については不明である。



第33図 SS1実測図 (S=1/20)

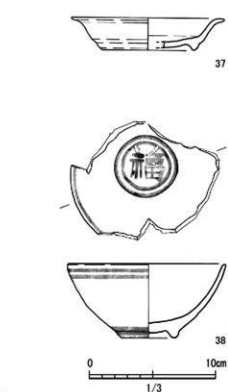


第34図 SS1 軽石実測図 (S=1/4)



第 35 図 SX1 実測図 (S=1/40 1/80)

1. 黒褐色土：1cm以下の黄色軽石まばらに含み、ブロック状に混じる



第 36 図 SX1 出土遺物実測図 (S=1/3)

(7) 不明遺構 (SX)

本遺跡で土坑や竪穴状遺構などが検出されているが、用途不明なものも多い。その中でも、遺構規模や形状などから他のどの遺構にも分類できないものを不明遺構として、以下報告を行う。

SX1 1号不明遺構 (第35図・第36図)

SX1はH-5区で検出された遺構である。SD10に切られているため詳細は不明であるが、長軸4.15m、深さは最大で22cmを測る、不定形である。床面が凸凹しているため、竪穴状遺構とは別の遺構として報告した。埋土は黄色軽石を含む黒褐色土で、黄色軽石がブロック状に混じる。遺構北側は溝によって切られているため、サブトレッチ5を設定して断面観察を行ったが、断面でも北側は確認できなかった。SX1は南東側にSC7が検出されているが、これがSX1に伴うものかは不明である。遺構内出土遺物は、土師器および陶磁器が数点出土している。土師器については小片であったため図化していない。37は白磁の皿で口径12.0cm、底径7.6cm、器高2.6cmを測る。高台をもち、口縁部が外反する。森田分類の白磁皿E-2b類に分類される。38は青花の碗で口径12.3cm、底径4.2cm、器高5.9cmを測る。見込みに「福」と書かれており、畳付には砂目の跡が認められる。小野分類の染付碗C群に分類される。

SX2 2号不明遺構 (第37図)

SX2はF-5区で検出された遺構である。他の遺構との切り合い関係はないが、調査の都合上調査区をI区とII区に分けたちよど境界部分で検出されているため、詳細が不明である。I区については、西壁が攪乱を受けたように土が乱れているため、SX2のような遺構は検出されなかった。長軸や短軸については不明であるが、深さは最大で15cmである。埋土は他の遺構に比べて明るい土が堆積しており、軟質の暗褐色土である。SX2から遺物は出土していない。

第4節 包含層出土遺物 (第38図)

郡元西原遺跡では、包含層からあまり多くの遺物は出土していない。出土遺物としては土師器・須恵器・白磁・青磁・石器類等が出土している。出土層はⅢ層黒色シルト土であるが、Ⅲ層出土の遺物については小片が多く実測に耐え得るものが少なかった。そのため、今回は表土層(Ⅰ層)から出土している遺物も含めて掲載を行う。詳細については、出土遺物観察表を参照していただきたい。なお、陶磁器の分類については主に、11～14世紀のものについては大宰府分類、14世紀以降については森田分類及び上田分類を用いて分類を行っている。

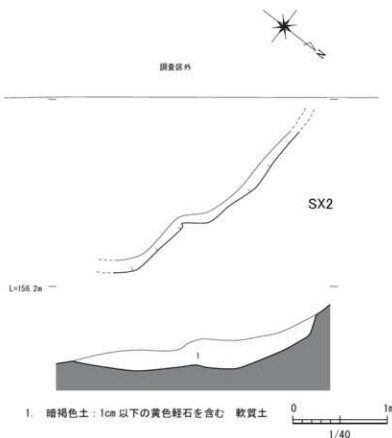
39～44は土師器である。土師器は出土資料が少なかつたため、今回は口径や底径が分かる破片を中心に実測を行った。39・40は坏である。39は口径13.6cmを測り、丸みを帯びた体部をもつ。40は底径6.6cmを測る。直線的に延びる器形で、底部切り離しはヘラ切り後ナデ調整が行われている。41は高台付坏の底部片である。底径6.0cmを測り、高台内面はナデ調整が行われている。42～44は表土層出土の小皿である。42は口径11.2cm、底径9.1cm、器高1.75cmを測る。43と比較して口縁部はやや開き気味である。底部切り離しについてはヘラ切りである。43は口径9.6cm、底径8.2cm、器高1.75cmを測る。底部切り離しは不明確である。44は底径5.4cmを測る。底部についてはヘラ切りである。

45は東播系須恵器の捏鉢の口縁部片である。

46～50は白磁である。器種はいずれも碗である。46は口縁部片で、口径16.3cmを測る。玉縁口縁を持つものである。47についても玉縁口縁をもつ口縁部片で、46・47は大宰府分類白磁碗Ⅳ類に分類される。48は底径6.4cmを測る。小片のため、文様は不明確であるが、内面に楕目文を描いているもので、高台内面は露胎している。大宰府分類白磁碗Ⅴ-4b類である。49は口径12.0cm、底径5.2cm、器高3.4cmを測る。底部がやや突き出しており、基筋底である。体部から口縁部にかけては器壁が薄く、口縁部は直行する。旋輪は体部下半から露胎している。50も49と類似する器形を持ち、底径4.1cmを測る。49に比べて底部から体部にかけては丸みを帯びた器形を呈する。森田分類E-3類に分類される。

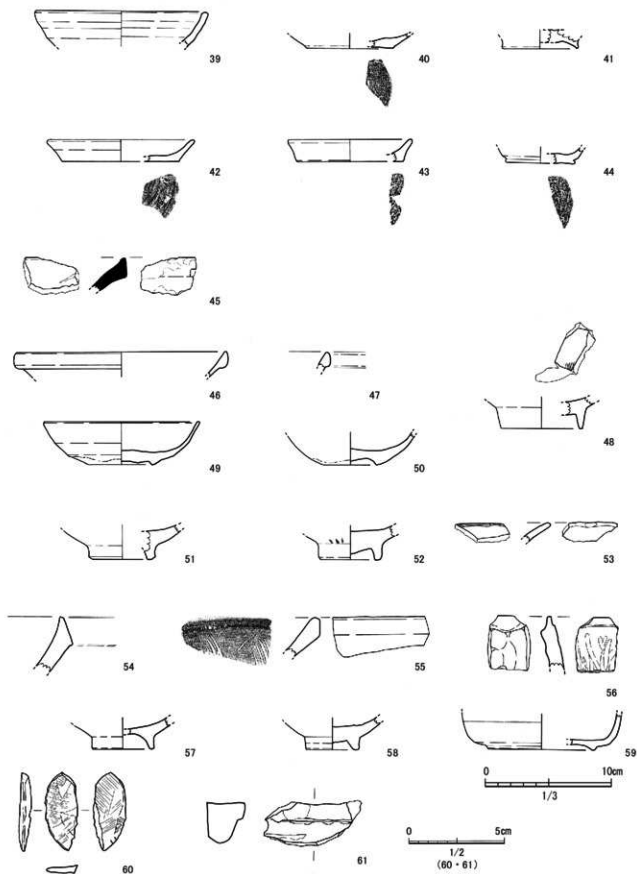
51～53は青磁である。51・52は底部片である。51は底径4.6cmを測る。畳付～高台内面にかけては露胎している。上田分類の青磁碗E類である。52は底径4.6cmを測る。高台部分にも旋輪されており、高台内面は露胎している。底部の器壁は非常に厚く、1.9cmを測る。口縁部が欠損しているため器形は不明確であるが、上田分類の青磁碗B-Ⅳ類に分類される。53は龍泉窯系棧花タイプの皿の口縁部片である。明代の皿である。

54～61はその他の遺物で、出土点数の少なかつたものである。54は備前焼の挿鉢の口縁部片である。55は瓦質土器の挿鉢である。56についても瓦質土器と考えられるが、詳細については不明である。口縁部については内外面ともに、挟られたような先細りの器形を呈しており、外面はヨコナデ調整が行われている。胴部については、内面は工具の跡が残るナデ調整、外面はヘラ状工具で施された沈線文のような文様が認められる。小片のため器形についても不明である。57・58は薩摩焼である。57も薩摩野原系の碗の底部で底径4.9cmを測る。畳付は露胎している。



第37図 SX2実測図 (S=1/40)

58は龍門司系薩摩焼の碗の底部で、底径4.0cmを測る。内面は蛇ノ目軸剥ぎされている。59は肥前系の鉢で、底径8.3cmを測る。蓋付鉢の可能性が考えられる。60・61は滑石製品である。60は丸みを帯びた形状から、紡錘車の可能性が考えられる。61は滑石製石鍋の鏝部分で、磨面が認められることから転用品であると考えられる。



第38図 包含層出土遺物実測図 (S=1/3)

第5節 小結

今回の発掘調査では、竪穴状遺構2基・掘立柱建物跡2棟・土坑7基・溝状遺構22条のほかピット等が検出された。今回の調査区からは主に中世の遺構・遺物が検出されているが、一部近世～近代における遺物も認められた。以下、郡元西原遺跡の調査結果について遺物・遺構ごとにまとめておきたい。

まず遺構については先に述べたように、溝状遺構を中心として掘立柱建物跡などが検出された。掘立柱建物跡を除いては明確な機能や用途を限定できる遺構は少なく、特に溝状遺構については遺構同士の切り合いも激しいことから規格性の乏しいものが大半を占めている。各遺構の時期については、遺構内出土遺物のほかに文明軽石の堆積状況などを考慮しながら時期比定を行いたい。その中でも上限は11世紀後半～12世紀前半、下限は16世紀末頃と考えられる。まず文明軽石の堆積状況をもとに大きく3つに分類した。

①遺構堆積土中に文明軽石を含まないもの SD1・SD2・SD4・SD6・SD8・SD10・SD13～16・SD18～21

②遺構堆積土の最上層に文明軽石の一次堆積が認められるもの SD7・SD11・SD17・(SD9)

③遺構堆積土の最上層に文明軽石と考えられる白色軽石を含むもの SD3・SD5・SD12

この中で②と③については出土遺物はほとんど認められないものの、文明軽石の堆積状況より、②は少なくとも14世紀後葉～15世紀前葉までには廃棄された遺構であると考えられる。③は切り合い関係にある遺構の中でも新しいことから、少なくとも文明軽石降下以後の16世紀代と考えられる。①については、この中でも③よりも時期が新しいもの、②よりも古いものなどの時期差がある。そこで次に文明軽石の堆積状況と併せて遺構の切り合い関係、遺構内出土遺物を踏まえた上で各遺構を大きく3時期に分類した。なお、矢印で示しているのは切り合い関係から分かる他の遺構との新旧関係である。

第1段階（11世紀後半～12世紀前半） SC5

第2段階（12世紀～15世紀前葉） SD7→SD8→SA2、SD6 SD11→SD19→SD18 SD16→SD20
SD9 SD17 SX1

第3段階（15世紀後葉～16世紀代） SD3→SD2 SD5→SD4 SD10→SD14 SD10→SD12→SD13 SC7

上記のように大きく3段階に分類を行ったが、遺構内出土遺物からSC5は床面から太宰府分類白磁碗V類に分類される白磁片が出土しており、第1段階に位置づけた。その他、太宰府分類白磁碗IV類の出土は認められたものの、明確に第1段階に位置づけられる遺構は認められなかった。

SD7は文明軽石の堆積と併せて、床面近くから龍泉窯系青磁碗II類が出土しており、このことから12世紀後半ごろに位置づける。SX1については、森田分類白磁皿E類と小野分類染付碗C群が出土しているものの、床面からの出土ではなかったため、14世紀末～15世紀前半ごろに位置づけを行っている。

SD2・SD13については第3段階に位置づけているが、第2段階の可能性も考えられる。

上記以外の遺構については、出土遺物がないことや他の遺構との切り合いが認められないため、時期比定は行っていない。その中でもSD1については埋土の状況より他の遺構よりも新しい可能性が高く、近世期の遺構である可能性も考えられる。SD15はSD18に並走しており、同時期の遺構の可能性もある。掘立柱建物跡については出土遺物もなかったことから時期判断が困難であったが、SB1とSB2は総面積が同様であることから同時期であると考えられる。これらの結果から、本遺跡の遺構は文明軽石の降下時期を挟んで大きく12世紀～15世紀前葉、15世紀後葉～16世紀代に分けることができる。

次に包含層からの出土遺物を見ると、陶磁器類については貿易陶磁器が少数であるが出土している。このうち白磁碗については大宰府分類IV～V類および森田分類E類が出土している。11世紀後半～12世紀前半と16世紀代の2つの時期幅が認められる。青磁碗については上田分類E類などが出土しており、また龍泉窯系の桜花皿が出土している。おおよそ15世紀代と考えられる。国産陶磁器についてはわずかであるが、備前の播鉢や瓦質時の播鉢が出土しており、これも15～16世紀と考えられる。

土師器については坏や小皿が出土しており、破片資料が多いため器形や法量から時期比定を行うのは難しいが、都城編年の12世紀後半～14世紀のものと類似している。これらのことから、包含層出土遺物から時期比定を行うと、出土数は少量ながらも11世紀後半～14世紀代、15～16世紀という2つの時期幅が認められる。

以上、本遺跡の検出遺構及び包含層出土遺物から遺跡の時期比定を行った結果、11世紀後半～16世紀代の間で時期幅が認められることが分かった。

以上のように遺跡の時期比定を行ってきたが、今回検出された溝の走行方向に視点をやると、集落の様相を垣間見ることができそうである。Ⅱ区では時期のズレはあるが、SD9・SD11～SD14・SD17はすべて平行して南北方向に延びている。切り合いで分かりにくいSD15・SD16・SD18についても同方向に延びていると推定される。そしてSD9・SD15・SD18は直角に屈曲して東西方向に延びており、区画溝の様相を呈している。

これらのことから郡元西原遺跡周辺でも、久玉遺跡や松原地区遺跡のように溝状遺構に区画された集落が存在していたことを想定することができる。調査区が南北に延びており詳細は不明であるが、少なくとも、SD9やSD15・SD18が区画する範囲は東側に延びている。大溝のSD11とSD12～SD14は屈曲部分が検出されなかったことから区画溝であるか不明である。しかし、久玉遺跡の第1次調査や松原地区遺跡の結果から考えると、大溝で区画し、さらに中を細い溝で囲む造りが見取れることから、SD11等が区画溝であるならば、調査区より西側に区画された範囲の広がりが見取れる。

【参考文献】

- 案畑 光博 2004「都城盆地における中世土師器の編年に関する基礎的研究(1)」『宮崎考古』第19号 宮崎考古学会
- 郡城市教育委員会 1989『松原地区第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡』郡城市文化財調査報告書 第7集
- 郡城市教育委員会 1993『天神原遺跡』郡城市文化財調査報告書 第23集
- 郡城市教育委員会 1993『久玉遺跡第5次発掘調査・油田遺跡・正飯原遺跡』郡城市文化財調査報告書 第25集
- 郡城市教育委員会 2015『祝吉第3遺跡(第2次調査)』郡城市文化財調査報告書 第116集

第2表 検出ピット詳細一覧表

ピット№	検出区	直径(cm)	深さ(cm)	ピット№	検出区	直径(cm)	深さ(cm)	ピット№	検出区	直径(cm)	深さ(cm)
P1	C-8	31	28	P11	G-5	26	47	P21	I-3	27	16
P2	C-9	35	41	P12	G-4	21	15	P22	I-4	32	23
P3	D-8	34	25	P13	G-4-5	18	11	P23	I-5	29	30
P4	F-5	61	35	P14	H-4	39	46	P24	I-5	26	27
P5	F-6	42	36	P15	H-4	23	54	P25	I-5	24	30
P6	F-6	44	39	P16	H-5	20	18	P26	I-4	24	32
P7	F-5	50	38	P17	H-4	33	22	P27	J-4	18	27
P8	G-6	34	22	P18	H-4	22	28	P28	J-3	37	30
P9	G-5	26	37	P19	H-4	30	27	P29	J-3	42	32
P10	G-5	28	35	P20	H-I-3	32	40	P30	J-3	33	25

第3表 都元西原遺跡出土須恵器・陶磁器観察表

図録 №	遺物 種別	器種	部位	厚	寸法(cm)		文様・装飾		色調	胎土	胎土の色調	分類	時期	備考		
					口径	底径	高さ	外面							内面	
第1区	1	白磁	碗	口縁～胴部	SC5	-	-	施釉	施釉	灰白 (SY7.2)	緑釉	灰白 (SY6.7)	白磁焼V類	11世紀後半～ 12世紀前半		
第1区	4	灰磁	壺	胴部	SD1	-	-	ナデ	ナデ	灰白 (7.5Y7.2)	黄灰 (2.5Y5.3)	3mm以下の砂 粒・黒石・緑石	東洋	12世紀後半～ 13世紀前半	内面に自然釉	
	5	灰磁	小空瓶	胴～底部	SD1-拵	-	2.3	施釉	施釉	灰白 (7.5Y7.2)	緑釉	灰白 (7.5Y7.1)	灰釉 産地不明	近世～近代	裏付～高白内 無釉・反転光	
	6	灰磁	鉢	口縁～胴部	SD1-拵	22.8	-	施釉	施釉	外黄灰(2.5Y4.7) 内灰白(7.5Y8.2)	2mm以下の砂粒	にぶい黄緑 (2.5Y6.4)	鎌倉時代系	18世紀	口唇部釉割れ・ 反転光	
	7	灰磁	磁鉢	口縁～胴部	SD1-拵	25.9	-	施釉	施釉	外黄灰(2.5Y4.7) 内反転(3.5Y6.2)	2mm以下の砂粒	緑灰 (7.5Y4.1)	鎌倉時代系	18世紀	口唇部釉割れ・ 反転光	
第1区	8	白磁	碗	口縁～胴部	SD2-拵	16.0	-	施釉	施釉	灰白 (5.7Y.2)	緑釉	灰白 (5.7Y.1)	大塚分府 白磁焼V類	11世紀後半～ 12世紀前半	反転光	
	9	白磁	碗	口縁～胴部	SD2	-	-	施釉	施釉	灰白 (7.5Y7.2)	緑釉	灰白 (10.7Y.1)	大塚分府 白磁焼V類	11世紀後半～ 12世紀前半		
第1区	12	中世須恵器 (須恵系)	磁鉢	胴～底部	SD7	-	9.8	ナデ	-	灰白 (5.7Y.1)	3mm以下の砂 粒・黒石	灰白 (5.7Y.1)	東洋系	12世紀末～ 13世紀前半	内面に自然・2回 刷塗・反転光	
	13	中世須恵器 (須恵系)	壺	口縁～胴部	試験型 (SD7)	-	-	胎土不明 9.8×2.1×1.7	回転ナデ	灰 (NS.7)	3mm以下の砂粒	灰 (5.7Y.1)	東洋系	12世紀末～ 13世紀前半	反転光	
	14	青磁	碗	底部	SD7	-	5.8	施釉	施釉	外ナデ(2.5Y4.7) R射(7.5Y3.0)	緑釉	灰白(N7.7)	鎌倉系 青磁Ⅲ系 青磁Ⅱ系	13世紀前期	高台内面・ 反転光	
第2区	16	青磁	碗	底部	SD10・ 試験型2?	-	6.2	施釉	施釉	灰白ナデ (7.5Y.2)	緑釉	灰 (2.5Y6.1)	鎌倉系 青磁Ⅲ系 (上・中分府0類)	18世紀前半～ 19世紀中頃	貫入・反転光	
第2区	31	青磁	碗	胴～底部	SD12	-	5.3	施釉	施釉	明緑灰 (7.5G7.1)	緑釉	灰白 (5.7Y.2)	鎌倉系 青磁Ⅲ系 (上・中分府0類)	18世紀前半～ 19世紀中頃	貫入・反転光	
	33	青磁	椀花皿	口縁～胴部	SD16	-	-	施釉	施釉	緑灰 (7.5G6.1)	緑釉	灰 (5.7Y.1)	鎌倉系 明代系	15世紀		
第2区	37	白磁	皿	口縁～底部	SK1	12.0	7.6	2.6	施釉	施釉	灰白 (2.5G6.1)	青磁系 無色系磁物 (反白NB.7)	灰白 (NB.7)	森田分府 白磁焼E-3類	15世紀中頃～ 16世紀中頃	裏付無釉・ 反転光
	38	青花	碗	口縁～底部	SK1他	12.3	4.2	5.9	施釉	施釉	灰白 (7.5Y6.1)	緑釉	灰白 (NB.7)	小野分府 染付焼E群	15世紀末～16 世紀中頃	口縁部・2回 刷塗・反転光
第2区	45	中世須恵器 (須恵系)	磁鉢	口縁部	並型	-	-	ナデ	ナデ	黄灰 (2.5Y5.1)	3mm以下の砂粒	黄灰 (2.5Y6.2)	森田分府 黄磁Ⅲ系0類	13世紀前半～ 後半		
	46	白磁	碗	口縁部	1層	16.3	-	施釉	施釉	外灰白(3.7Y.2) 内黄灰(3.7Y.2)	緑釉	灰白 (5.7Y.1)	大塚分府 白磁焼V-3類	11世紀後半～ 12世紀前半	反転光	
	47	白磁	碗	口縁部	並型	-	-	施釉	施釉	灰白 (7.5Y7.1)	青磁系 無色系磁物 (反白NB.7)	灰白 (7.5Y7.1)	大塚分府 白磁焼V-3類	11世紀後半～ 12世紀前半		
	48	白磁	碗	底部	1層	-	6.4	施釉	施釉	灰白 (5.7Y.2)	緑釉	灰白 (5.7Y.2)	大塚分府 白磁焼V-4類	12世紀中頃～ 後半	唇部・2回 刷塗	
	49	白磁	碗	口縁～底部	1層	12.0	5.2	3.4	施釉	施釉	灰白 (5.7Y.2)	緑釉	灰 (2.5Y6.2)	森田分府 E-3類	16世紀	裏付・2回 刷塗
	50	白磁	碗	胴～底部	1層	-	4.1	施釉	施釉	外灰白(3.7Y.2) 内黄灰(3.7Y.1)	緑釉	灰白 (2.5Y6.2)	森田分府 E-3類	16世紀	裏付・2回 刷塗・反転光	
	51	青磁	碗	底部	1層拵	-	4.6	施釉	施釉	灰白 (7.5Y7.2)	緑釉	灰白 (7.5Y7.1)	上田分府 青磁Ⅲ系 E-5類	14世紀後半～ 15世紀後半	裏付・高白内 無釉・反転光	
	52	青磁	碗	底部	1層	-	4.6	施釉	施釉	灰白 (7.5Y7.2)	緑釉	灰白 (7.5Y7.1)	上田分府 青磁Ⅲ系 E-5類	15世紀後半～ 16世紀前半	裏付・高白内 無釉・反転光	
	53	青磁	椀花皿	口縁部	1層拵	-	-	施釉	施釉	灰白 (5.7Y6.1)	白釉	灰 (7.5Y6.1)	鎌倉系 明代系	15世紀		
	54	灰磁	磁鉢	口縁部	1層	-	-	ナデ	ナデ	灰 (5.7Y.1)	2mm以下の白粒・ 3mm以下の砂粒	灰 (2.5Y6.1)	備前	15世紀前半		
	55	瓦葺土器	磁鉢	口縁部	1層	-	-	口ワロナ ナデ	口ワロナ ナデ	灰 (5.7Y.1)	3mm以下の砂粒	灰 (2.5Y7.2)	-	15～16世紀		
	56	瓦葺土器 ?	器種不明	口縁～胴部	1層	-	-	ヨコナデ・ ナデ型?	ナデ	灰白 (5.7Y.2)	2mm以下の砂粒・ 3mm以下の砂粒	灰白 (5.7Y.1)	-	-	外面に流釉	
	57	灰磁	碗	底部	1層	-	4.8	施釉	施釉	黄灰 (2.5Y6.4)	緑釉	黄灰 (2.5Y6.2)	鎌倉系野系	18世紀代か?	裏付無釉・ 反転光	
	58	灰磁	碗	底部	1層	-	4.0	施釉	施釉	外黄灰(2.5Y4.7) 内黄灰(2.5Y6.2)	緑釉	にぶい黄緑 (10.7Y.4)	鎌倉系野系	18世紀(後半)	裏付無釉・内面 3回刷塗・反転光	
	59	磁器	鉢	胴～底部	1層拵	-	6.3	施釉	施釉	白(N.7)	緑釉	白(N.7)	肥前系	18世紀代	裏付・裏付無 釉・反転光	

第4表 郡元西原遺跡出土土師器観察表

図版No.	遺物No.	種別	器種	部位	厚	法量(cm)		文様・調整		色調		胎土	焼成	備考	時期	
						口径	底径	外径	内径	外面	内面					外面
第11図	2	土師器	小皿	口縁～底部	SD1	8.8	7.4	1.4	回転ナデ	回転ナデ	灰黄 (2.5Y7/2)	灰黄 (2.5Y7/2)	石黄・黒石	良好	へう切り・反転還元	12世紀後半～ 14世紀前半
"	3	土師器	小皿	口縁～底部	SD1	—	8.4	—	回転ナデ	回転ナデ	浅黄緑 (7.5YR8/6)	浅黄緑 (7.5YR8/6)	1cm以下の赤鉄 ・黒色鉱物	良好	へう切り・反転還元	12世紀後半～ 14世紀前半
第14図	10	土師器	杯	底部	SD7	—	10.4	—	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄緑 (10YR7/4)	にぶい黄緑 (7.5YR7/4)	2mm以下の赤鉄 ・白鉄	良好	底部陥伏仕立・反 転還元	12世紀後半～ 13世紀前半
"	11	土師器	小皿	口縁～底部	SD7	9.4	8.3	1.0	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄緑 (10YR7/4)	にぶい黄緑 (10YR7/4)	微細な黒色鉱物	良好	へう切り・反転還元	12世紀後半
第15図	17	土師器	杯	口縁～底部	SD10	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	褐色 (10YR8/4)	浅黄緑 (10YR7/4)	石黄	良好	口唇部ナデ	12世紀末～ 13世紀前半
第21図	21	土師器	杯	底部	SD11	—	8.4	—	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄緑 (10YR7/4)	浅黄 (2.5Y7/4)	3mm以下の赤鉄	良好	赤切り・反転還元	11世紀前半～13世紀初頭
"	22	土師器	杯	底部	SD11	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄緑 (7.5YR7/4)	浅黄 (2.5Y7/4)	2mm以下の赤鉄	良好	赤切り	12世紀以降
第25図	34	土師器	小皿	口縁～底部	SD19	7.8	7.2	1.75	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄緑 (10YR7/4)	黄 (7.5YR7/6)	3mm以下の赤鉄 ・石黄・黒色鉱物	良好	赤切りか？・反転 還元	12世紀後半～ 14世紀前半
第28図	39	土師器	杯	口縁～底部	並帯	13.6	—	—	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄緑 (10YR7/4)	にぶい黄緑 (10YR7/2)	2mm以下の赤鉄	良好	反転還元	12世紀末～ 13世紀前半
"	40	土師器	杯	底部	並帯	—	8.6	—	回転ナデ	回転ナデ	黄 (5YR7/6)	黄 (5YR7/6)	2mm以下の赤鉄 ・黒色鉱物	良好	へう切り後ナデ・ 反転還元	12世紀後半～ 14世紀前半
"	41	土師器	高台付杯	底部	並帯	—	8.0	—	回転ナデ ・ナデ	回転ナデ	浅黄緑 (10YR8/4)	浅黄緑 (10YR8/4)	微細な黒色鉱物 ・赤鉄	良好	高台内面ナデ・ 反転還元	?
"	42	土師器	小皿	口縁～底部	1層	11.2	9.1	1.75	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄緑 (10YR7/4)	にぶい黄緑 (10YR7/4)	2mm以下の赤鉄	良好	へう切り後ナデ	?
"	43	土師器	小皿	口縁～底部	1層	9.6	8.2	1.75	回転ナデ	回転ナデ	浅黄緑 (10YR8/4)	浅黄緑 (10YR8/2)	2mm以下の赤鉄	良好	反転還元	12世紀後半
"	44	土師器	小皿	底部	1層	—	5.4	—	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄緑 (10YR8/4)	にぶい黄緑 (10YR7/4)	2mm以下の赤鉄	良好	へう切り・反転還元	?

第5表 郡元西原遺跡出土粘土塊・石器・鉄滓観察表

図版No.	遺物No.	種別	器種	厚	法量(cm)			石材	備考	
					長さ	幅	厚さ			
第14図	15	粘土塊		SD7	7.0	6.6	2.2	73	—	スサぬり 伊壁の破片か？
第15図	19	粘土塊		SD10	3.9	4.0	1.1	11	—	スサぬり 伊壁の破片か？
"	20	石製品	礫石	SD10	13.3	10.7	2.7	900	—	
第21図	23	石製品	礫石	SD11	30.8	13.1	9.8	6200	—	
第18図	16	滑石製品	転用品？	SD8	2.5	1.2	1.2	9	滑石	外側にスス付着
第30図	60	滑石製品	紡錘車	並帯	4.2	1.7	0.6	5	滑石	
"	61	滑石製品	石網？ 転用品	1層	2.1	4.6	2.0	33	滑石	
第21図	24	軽石加工品		SD11 雑草中	8.6	10.3	8.0	240	軽石	
"	25	軽石加工品		SD11	7.7	8.5	7.1	144	軽石	ヤケあり 炭化物付着
"	26	軽石加工品		SD11	13.5	15.0	10.3	550	軽石	粘土？付着
第25図	32	軽石加工品		SD12	8.2	8.5	5.2	116	軽石	ヤケあり
第34図	35	軽石加工品		SD1	15.5	22.6	7.1	454	軽石	面取りあり
第34図	36	軽石加工品		SS1	16.8	18.5	5.2	398	軽石	面取りあり
第21図	27	鉄滓		SD11 雑草中	3.4	3.3	2.5	31	—	
"	28	鉄滓		SD11 雑草中	2.0	2.5	1.6	14	—	
"	29	鉄滓		SD11	4.4	5.3	2.1	56	—	
"	30	鉄滓		SD11	2.6	3.1	1.4	14	—	

第4章 南畑遺跡の発掘調査

第1節 調査の方法と概要

調査対象地は郡城市郡元町2952-30に所在し、国道269号線から北に100m程入った場所に位置する。調査前は宅地跡であった。郡元西原遺跡同様、市道建設に伴い行った事前の試掘調査により、遺跡が遺存している範囲約166㎡について発掘調査を実施した。

調査区は南東～北西方向に延びる長方形を呈する。調査地点は、大淀川の支流沖水川に浸食された郡城市街地を形成する開析扇状地の北側に立地しており、標高約155mに位置する。調査区はほぼ平坦で、北側から南側に向かって緩やかに傾斜する地形を呈している。なお、調査区の設定にあたっては、調査範囲が狭小であったためグリッドの設定は行わず、道路幅で遺跡が残存する範囲をトレンチとして設定した。

発掘調査はまず重機による表土剥ぎを行った。事前に実施した試掘調査では、現耕作層である表土層の直下で中世相当の遺構が検出されていたため、表土のみを重機により剥ぎ取った。それ以下は人力で掘り下げ、まず基本土層のⅢ層上面での遺構検出を行った。遺構・遺物検出後は適宜実測および写真撮影等の記録保存の措置を講じた。調査終了後は調査区の埋め戻しを行い、全ての調査工程を終了した。

調査の結果、中世の溝状遺構1条、道路状遺構1条および土坑1基を確認した。出土遺物については、包含層からの出土遺物は確認されず、遺構内から数点の土師器が出土した。

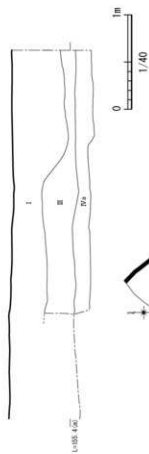
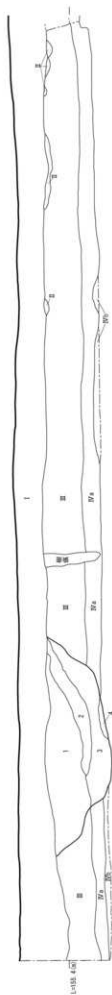
南畑遺跡の発掘調査は郡元西原遺跡に引き続き、平成26年8月11日から8月27日までの実質12日間作業を行った。この発掘調査と並行して出土遺物の水洗・注記作業を市文化財課で行った。平成27年度は前年度に引き続き出土遺物の接合・復元・実測等の整理作業および遺構図の整理を行い、その後発掘調査報告書の執筆・編集作業を行った。

第2節 南畑遺跡の基本層序（第39図）

本遺跡は郡元西原遺跡同様、大淀川の支流沖水川に浸食された開析扇状地の北側に立地しており、通常郡城市街地周辺の遺跡でみられるものと同様の土層堆積が確認された。鍵層となり得る火山灰は上位より桜島文明軽石、霧島御池軽石等がみられる。基本層序の設定にあたっては、試掘調査で確認できていた層順に加えて、先に調査を終えていた郡元西原遺跡の基本層序を基準とし、以下のとおり設定した。なお、本発掘調査では御池軽石層上面までの調査を行った。

- I 層 : 黒褐色砂質土…1cm以下の黄色軽石、5mm以下の白色軽石を含む
- II 層 : 白色軽石…桜島文明軽石「Sz-3」
- III 層 : 黒色シルト土…5mm以下の黄色軽石をまんべんなく含む
- IV a 層 : 黒褐色土…1cm以下の黄色軽石を大量に含む（御池軽石漸移層）
- IV b 層 : 黄色軽石…霧島御池軽石（「Kr-M」約4,600年前）

I層は、1cm以下の黄色軽石と白色軽石を含む黒褐色砂質土で、表土層である。宅地建設の際の造成土であると考えられる。II層は桜島起源の文明軽石である。調査区全体には堆積しておらず、部分的に確認できる程度である。III層は5mm以下の黄色軽石をまんべんなく含む黒色シルト土である。郡元西原遺跡では中世の遺物包含層である。本調査区では包含層出土遺物はなかったが、検出された遺構はいずれもIII層上面が検出面である。IV a層は黒褐色土で黄色軽石を大量に含む、いわゆる霧島御池軽石の漸移層である。IV b層は約4,600年前の霧島御池軽石層である。層序については、II層以下は郡元西原遺跡と同様の堆積である。



【土層説明】

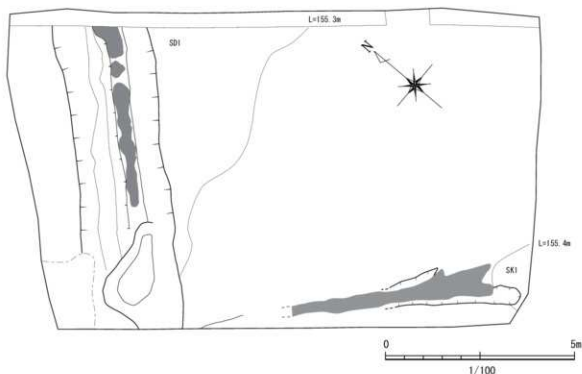
- I : 黒褐色砂質土…1cm以下の黄色軽石、5mm以下の白色軽石を含む
- II : 白色軽石…篠島文明軽石
- III : 黒色シルト土…5mm以下の黄色軽石まんべんなく含む
- IVa : 黒褐色土…1cm以下の黄色軽石を大量に含む（御池軽石階層移層）
- IVb : 黄色軽石…篠島御池軽石

(S01)

- 1: 灰褐色砂質土…5mm以下の黄色軽石・白色軽石を含み、やや軟質
- 2: 白色軽石…篠島文明軽石
- 3: 黒色シルト土…1cm以下の黄色軽石をまんべんなく含む
- 4: 黒褐色砂質土…2mm以下の黄色軽石をわずかに含む



第 39 図 東壘土層断面図 (S=1/40)



第40図 南畑遺跡遺構配置図 (S=1/100)

第3節 検出遺構

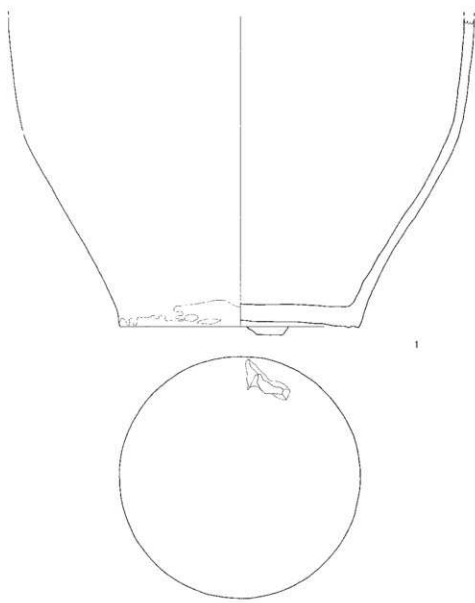
南畑遺跡の調査では、埋甕をもつ土坑1基、溝状遺構1条、道路状遺構1条が検出された。今回の調査で検出された遺構は土坑を除いて中世の遺構であると考えられるが、遺構内からは遺物がほとんど出土しておらず、包含層からも出土遺物が見られなかったため、詳細な時期については不明である。検出遺構は郡元地区で多く検出されている中世の溝状遺構が検出されていることから、郡元西原遺跡及び他遺跡との関連も考慮される。

(1) 土坑 (SC1) (第41図・写真図版1)

SC1は調査区南西側、SK1と隣接してⅢ層上面から検出された。実測を行っていないため正確な大きさについては不明であるが、薩摩焼の甕が埋められた状態で検出されており、長径約74cm前後、短径約51cm前後の大きさを測る。甕の上部は削平を受けており、口縁部は見つかっていないが、胴部から底部にかけてはしっかりと残存していた。土坑は甕よりも大きめで土坑北側端と甕が接するように埋められていた。甕内部には部分的に明黄褐色の付着物が認められた。当遺構は当時のトイレと考えられ、付着物は排泄物であると考えられる。トイレとして使用された甕は18世紀後半頃のものと考えられるが、遺構の使用時期とは時期差がある可能性もある。1は苗代川系薩摩焼甕で、器面全体に鉄軸が施され、底部で軸ダレしている。口縁部が残存していないが、底径25.4cmを測る。底部には1箇所コマ目が見られる。

(2) 溝状遺構 (SD1) (第42・43図)

SD1は、調査区北側を北東-南西方向に延びる溝状遺構である。Ⅲ層上面の検出で、長さ約8.4m、幅は2.2～2.3m、深さは最大で64cmを測る。郡元西原遺跡検出の溝と比べて遺構幅の割に深さは浅く、南西側では段掘りになっている。遺構内には3枚の埋土が堆積しており、南東側から流れ込むように堆積している。埋土2は桜島文明軽石の二次堆積層である。遺構の床面には硬化面が貼られており、2～6cmの厚さが確認された。北東側では厚さを持つしっかりとした硬化面で、南西側に行くにつれて薄く途切れている。また、南西側は不定形の落ち込みがあり、溝はその落ち込みに切られているような状況であった。落ち込みの東側の立ち上がりは検出できなかったため、遺構の詳細は不明である。遺構内出土遺物として土師器が8点出土したが、いずれも小片で磨耗しており、詳細については不明である。その中でも小皿と考えられる底部が3点出土しているが、底部切り離しが小片のため判断し難い。2については底径8.0cmを測る。磨耗が激しく、底部切り離し技法については不明である。内面には炭化物の付着が認められる。



第 41 図 土坑内埋壘実測図 (S=1/4)

写真図版 1



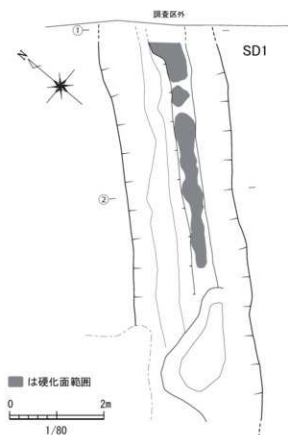
土坑検出状況



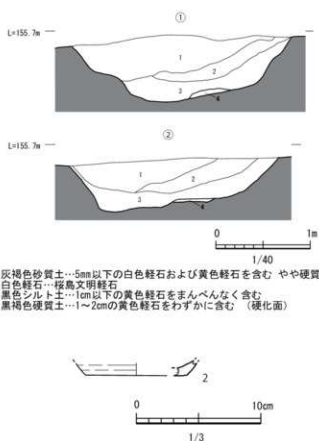
土坑半露状況



土坑完掘状況



第 42 図 SD1 実測図 (S=1/40 1/80)



第 43 図 SD1 出土遺物実測図 (S=1/3)

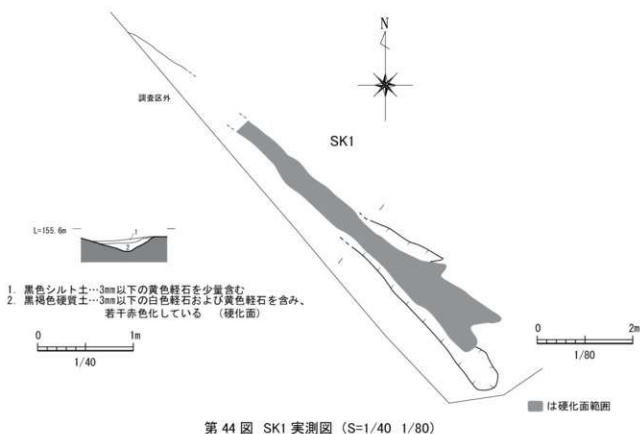
(3) 道路状遺構 (SK1) (第 44 図)

SK1は、調査区西側を北西-南東方向に延びる道路状遺構である。長さ約8.4m、幅約66cm、深さは最大で14cmを測る。深さは浅いものの、硬化面が8cmの厚さで貼られている。遺構は北西側は試掘調査の10トレンチに切られている。試掘の際には検出できていなかったが、しまりの強い層の(1b層)を確認していることから、SK1の硬化面が残存していたと考えられる(第1図参照)。南東側では遺構の立ち上がりを確認することができ、立ち上がり部分にも硬化面が貼られていた。しかし硬化面の形状が崩れており、北西側では立ち上がり部分の硬化面は検出されず、床面のみを検出であった。SK1から遺物は出土していない。

第 4 節 小 結

南畑遺跡では、土坑・溝状遺構・道路状遺構をそれぞれ検出した。調査区が狭小であったため、遺跡の全容は不明確であるが、郡元地区から多く検出される溝状遺構が検出された。

SD1とSK1についてはいずれもⅢ層上面からの検出であり、遺物の出土がほとんど見られなかった。南西側の調査区外では2つの遺構が切り合う可能性があるため、SD1とSK1には時期差があると考えられる。SD1から少数ながらも出土した小皿の底部片は、磨耗が激しく出土遺物から時期比定を行うことは難しい。文明軽石の堆積状況から、少なくとも14世紀後半～15世紀前半までには廃棄されたと考えられ、13世紀代の溝である可能性が考えられる。埋糞を伴うSC1については前述したとおり、当時のトイレとして使用されていたものであると考えられる。18世紀後半頃の苗代川系の甕が使用されていることから、少なくとも18世紀後半以降の遺構であるといえる。



【参考文献】

柴畑 光博 2004「都城盆地における中世土器の編年に関する基礎的研究」『宮崎考古』第19号 宮崎考古学会

近沢 恒典 2011「都城盆地の古代土器の編年について」『平成23年度埋蔵文化財担当専門職員研修会』宮崎県埋蔵文化財センター

第6表 南畑遺跡出土遺物観察表

調査No.	遺物No.	種別	器種	部位	層	法量(cm)		文様・調整		色調		胎土	備考	
						口径	底径	器高	外底	内面	外底			内面
第4区	1	陶器	壺	胴～底部	SC1	-	25.4	-	筋輪	筋輪	黒褐 (SYR2/2)	黒褐 (SYR2/2)	4cm以下の磁物	底部に一箇所コマ目・隆線古代川系
第4区	2	土器器	杯	底部	SD1	-	8.0	-	回転ナズ	回転ナズ	淡黄緑 (7.SYR8/6)	橙 (SYR7/6)	1cm以下の磁物	内面炭化物付着・反転産物

第5章 まとめ

最後に、今回の調査成果を踏まえて、郡元・早水地区の中世～近世における様相をまとめておきたい。

今回の調査から、調査区周辺では11世紀後半～16世紀代における遺構や遺物が出土しており、遺跡の中で時期幅が認められた。南畑遺跡で検出された溝状遺構については、文明軽石の堆積状況から少なくとも14世紀後半～15世紀前半ごろまでには廃棄されていた遺構であると考えられ、やはり郡元西原遺跡の溝状遺構と同時期に位置づけられる。周辺には前述している通り、久玉遺跡、松原地区遺跡、榊山・郡元地区遺跡、天神原遺跡等多くの中世の遺構が検出されている遺跡が存在する。都城市内では11世紀後半～12世紀前半に位置づけられる大宰府分類白磁碗Ⅳ類が市内全域でまんべんなく出土しており、特に今回調査を行った郡元・早水地域は、市内西部の横市川流域、市内南部の今町・梅北・安久付近と並び、出土遺跡が密集して分布している地域である。

これまでの調査結果より、この地域では平安時代末～中世・近世にかけて、大きく3つの集落形成地域があったと考えられる。まず祝吉遺跡・久玉遺跡・松原地区遺跡を中心とする北部元地区、次に祝吉第3遺跡・榊山・郡元地区遺跡・天神原遺跡を中心とする南部元地区、そして牟田ノ上遺跡・池ノ友遺跡を中心とする早水地区である。

早水地区では、遺跡周辺で平安時代後期には集落が形成されており、遺跡の中心は11世紀後半～14世紀初頭とされている。また、池島遺跡でも平安時代後期の遺構が検出されており、出土遺物については市内で唯一の初期高麗青磁が出土している。

北部元地区では、久玉遺跡や松原地区遺跡で特に多くの遺構・遺物が出検されている。久玉遺跡では溝に囲まれた集落の構造が認められ、大きく分けて13世紀後半～14世紀前半、14世紀後半～15世紀前半、17～18世紀代の3時期が見て取れる。中でも14世紀後半～15世紀前半においては、溝で方形に区画された推定面積2,856㎡の屋敷地が見つかる。松原地区遺跡でも、13世紀後半頃の自然地形を利用してL字型に廻らした大溝に区画された館跡、14世紀後半～15世紀前半の溝に区画された館跡が見つかる。久玉遺跡と松原地区遺跡の大溝を廻らす館跡は一連のものであると考えられており、この地区では13世紀後半～14世紀前半ごろが集落の中心であると考えられている。この2遺跡では17世紀以降の館跡も部分的に見つかっており、集落の集約化が行われながらも、17世紀以降も存続していたとされる。

南部元地区では、3遺跡ともに時間幅を持っており、それぞれの遺跡の中心は14～15世紀前半である。祝吉第3遺跡は13～14世紀にかけての時間幅を持った遺跡で、14世紀代が遺跡の中心である。天神原遺跡についても12～15世紀にかけての時間幅を持った遺跡で、その中でも13世紀後半～15世紀前半が遺跡の中心時期である。榊山・郡元地区遺跡は12～17世紀にかけての大きな時間幅を持つ遺跡で、その中でもやはり他の2遺跡同様14～15世紀前半が遺跡の中心であるが、17世紀以後も一部の地域に集約されながら集落が存続している状況が窺える。天神原遺跡では17世紀代の遺構・遺物が見つからないことから、文明軽石の降下を境に集落の再編に伴って遺跡一帯が徐々に空白地帯と化していき、16世紀末以降の様相については、榊山・郡元地区遺跡周辺に集落の集約化が行われているとしている。

以上のように、郡元・早水地区では14世紀～15世紀前半に集落内での遺構構築のピークを向かい、16世紀末以降は集落の集約化に伴い、遺構の集中城が偏っているという状況が窺える。横山哲英氏は、「少なくとも都城盆地の東部地域においては、中世から近世への過渡期に何らかの制約・目的の下、集落の再編成が行われたものとも推察される」としている。これらのことから、当遺跡でも確実に近世に位置づけられる遺構は検出されておらず、薩摩焼などが散点出土している状況を見ると、当遺跡一帯は16世紀以降集落の再編成によって、久玉遺跡等を中心とする集落の縁辺部となったと推察される。

【参考文献】

- 柴畑 光博 2015「郡城市内で発掘された中世の焼き物たち」『焼き物にみる武士の心』平成27年度シンポジウム資料集 郡城市教育委員会
- 郡城市教育委員会 1993『天神原遺跡』郡城市文化財調査報告書 第23集
- 郡城市教育委員会 1993『久玉遺跡第5次発掘調査・油田遺跡・正原遺跡』郡城市文化財調査報告書 第25集



郡元西原遺跡透景（南上空より）



郡元西原遺跡Ⅱ区全景



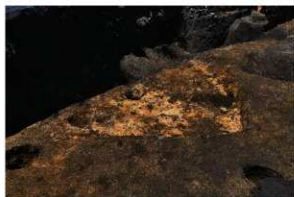
都元西原遺跡 | 区全景



都元西原遺跡土層堆積状況



SA1 検出状況 (東側より)



SA1 完掘状況 (東側より)



SC2・SC3・SC4 完掘状況 (南東側より)



PI8 検出状況



SC5 完掘状況 (南側より)



SD1・SB1 完掘状況 (南東側より)



SD1 埋土堆積状況 (東側より)



SD4～SD7 検出状況（西側より）



SD4・SD5 完掘状況（西側より）



SD7 完掘状況（東側より）



SD7 埋土堆積状況（東壁）



SD9 検出状況 (西側より)



SD9 完掘状況 (西側より)



SD10 埋土堆積状況



SD10 床面礫検出状況



SD10 完掘状況 (東側より)



SD11 検出状況 (北側より)



SD11 文明軽石直上礫検出状況

写真図版 7



SD11 完掘状況 (北側より)



SD11 埋土堆積状況



SD12 ~ SD14・SD17 検出状況 (北側より)



SD12 ~ SD14・SD17 埋土堆積状況



SD17 (文明軽石部分) 検出状況



サブレンチ 5 断面 (SD10・SD16・SD20・SX1)



SS1 検出状況



南畑道跡調査区全景（北側より）



南畑道跡土層堆積状況（北東壁）



SD1 検出状況（南西側より）



SD1 埋土堆積状況



SD1 完掘状況（南西側より）



SF1 検出状況（南側より）







報告書抄録

ふりがな	こおりもとにしはるいせき・みなみざたいせき							
書名	郡元西原遺跡・南畑遺跡							
副書名	市道鷹尾上長飯通線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	都城市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第123集							
編著者名	原 栄子							
編集機関	都城市教育委員会							
所在地	〒885-0034 宮崎県都城市菰浦原町19-1 TEL. 0986-23-9547 FAX 0986-23-9549							
発行年月日	2016年3月							
所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
こおりもとにしはる 郡元西原遺跡	みやまの 宮崎県 みやまの 都城市 こおりもとにしはる 郡元町 にしはる 字西原	45202	M4023	31° 44' 31" 付近	131° 5' 37" 付近	2014.4.24 ～ 2014.7.29	495㎡	道路改良工事
みやまの 南畑遺跡	みやまの 宮崎県 みやまの 都城市 こおりもとにしはる 郡元町 みやまの 字南畑	45202	M4024	31° 44' 36" 付近	131° 5' 32" 付近	2014.8.11 ～ 2014.8.27	166㎡	道路改良工事
遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
郡元西原遺跡	集落跡	中世		竪穴状遺構 掘立柱建物跡 土坑 溝状遺構		土師器・須恵器 龍泉窯系青磁 白磁 鉄滓 軽石加工品		
南畑遺跡	集落跡	中世		溝状遺構 道路状遺構		土師器		
要約	郡元西原遺跡と南畑遺跡は都城市郡元町に所在する。市道鷹尾上長飯通線道路改良工事に先立ち、本発掘調査を実施した。 郡元西原遺跡と南畑遺跡は、沖水川に浸食された開析扇状地の北側に立地しており、調査区周辺の標高は155～158mで推移している。 今回の発掘調査では露島御池軽石層よりも上位を対象として調査を実施した。発掘調査の結果、郡元西原遺跡・南畑遺跡ともに郡元地区で数多く検出されている溝状遺構が検出された。郡元西原遺跡では22条もの溝状遺構が検出されており、区画溝と思われる溝も見られる。出土物については、郡元西原遺跡では出土数は多くないものの、12～16世紀にかけての土師器、白磁や青磁といった貿易陶磁が出土している。							

都城市文化財調査報告書第 123 集

郡元西原遺跡・南畑遺跡

－市道鷹尾上長飯通線道路改良事業に伴う埋蔵文化財調査報告書－

2016 年 3 月

編 集 宮崎県都城市教育委員会
発 行 〒 885-0034 宮崎県都城市葛蒲原町 19-1
都城市役所葛蒲原町別館
TEL (0986) 23-9547 FAX (0986) 23-9549
印 刷 有限会社 都城新生社印刷
〒 885-0004 宮崎県都城市都北町 7284-1
TEL (0986) 38-3500 FAX (0986) 38-4187
